

特 10

696

山相馬  
傳勇忠住大馬相

091316-000-8

特10-696

松山相馬大作忠勇伝

夢香仙史／編

M23

DBN-2194

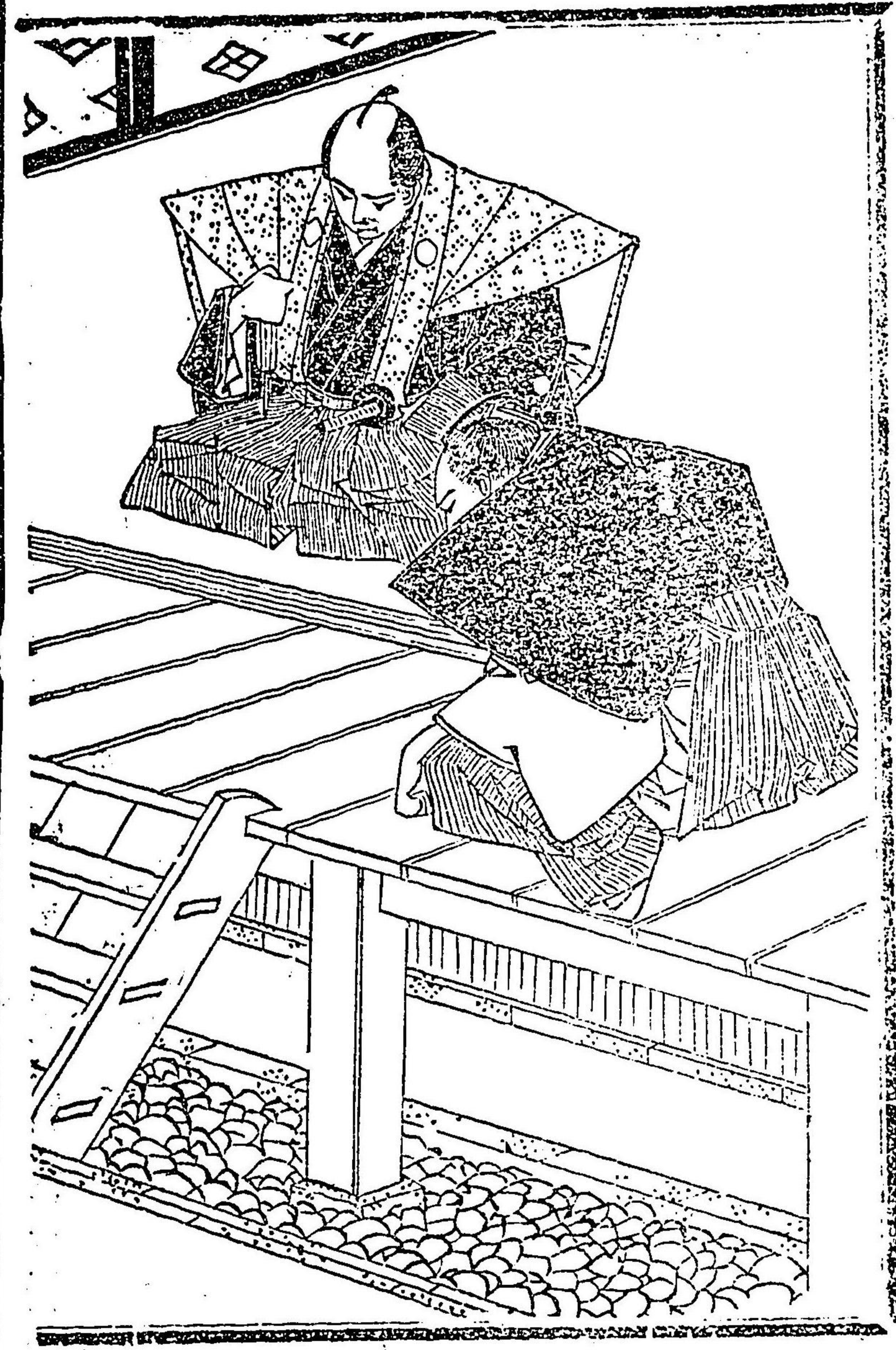


№1510 / 23

檜山相馬大作忠勇傳序

仙史性野乘稗史ヲ讀ナ好ミ操觚ノ暇アル時ハ唯ダ書ヲ次シシテ  
 無聊ヲ遣フ儀ハ則テ書ヲ枕トシ眠ル一日坊間ノ演講場ニ遊テ講  
 師壇上ニ在リ劉辨蕩々南部藩士相馬大作忠勇ノ事蹟ヲ演ス坐ニ  
 就キ之ヲ聞クニ其濫觴檜山橫掠ノ事ニ原因シ該藩士尾崎秀之助  
 ナル者其兇暴ヲ憤リ奮然回復ノ大志ヲ興シ名ヲ相馬大作ト更メ  
 耐忍不拔ノ銳志ヲ摧キ膽ヲ嘗メ薪ニ臥スルヲ數年千辛屈セス萬  
 苦撓マズ區々タル一孤身ヲ抛テ以テ堂々タル蒙族ヲ斃シ遂ニ宿  
 昔ノ本懐ヲ達シ本藩ノ汚辱ヲ雪ク偉功ノ顯示ヲ演ス仙史聞テ首  
 自而自首從容死ニ就クノ局ニ至リ感激禁マラス覺ヘス案ヲ相テ  
 シ而自首從容死ニ就クノ局ニ至リ感激禁マラス覺ヘス案ヲ相テ  
 大喝一聲嗚呼快ナル乎相馬壯ナル乎太作ト號ヒ驚而醒レハ則南  
 柯ノ一夢ニシテ夢中聽ク所ノ事歷尙ホ耳底ニ在リ因テ筆ヲ授キ







條ヲ追ヒ其顛末ヲ臚記ス之レ仙史平生嗜好スル所ヲ夢ミルモノ  
 ニテ所謂五夢中思夢ナル者乎固ヨリ夢中ノ聽聞ニ係リ其事蹟前  
 後幽冥渺漠風ヲ捕ヘ影ヲ打ツノ談ニソ世曾テ此事無キヲ信ス然  
 リト雖モ大作カ耐忍不拔ノ精神能ク強テ挫キ弱ヲ扶ケ其素懷ヲ  
 果孤忠君國ニ報スルノ思想ニ至テハ眞ニ偉丈夫ト云ヘシ其他之  
 ニ關スル勇壯義俠ノ人士モ亦共ニ感賞スルニ堪タリ其忠勇ノ美  
 名ヲ後世ニ遺ス豈偶然ニアラス寓言モ亦タ勸懲ノ一端ナラン乎  
 看官諸君痴者夢ヲ説クノ妄談ト之レヲ棄テ幸ニ愛讀ヲ辱フセ  
 ラル、ニ於テハ編者ノ幸甚ト云爾

明治二十年小春天長節

夢香仙史

八 檜山相馬大作忠勇傳目次

- 第壹回 尾崎秀之助盛出立之事
- 第貳回 中山幸之進馬術に妙を顯す事  
并 戸坂の娘お千代秀之助を戀慕の事
- 第參回 秀之助相馬權現へ誓願の事  
并 雀の宮にて須賀留を討事
- 第肆回 大作須賀留の乗物を炮發する事  
并 砂手渡し場にて須賀留を騒がす事
- 第伍回 大作須賀留を討取る事  
并 大作伊達三次面會の事
- 第陸回 伊達三次景清源太を討事  
并 綱五郎土場へ立寄事
- 第柒回 綱五郎青鬼の片腕を斬事  
并 綱五郎井筒屋を退く事
- 第捌回 井筒屋家内騒動の事
- 第玖回 於千代砂手にて艱難の事  
并 於千代再び危難の事
- 第拾回 喜三郎國定於千代と名乗逢ふ事  
并 三日月藤兵衛發心の事

- 第拾壹回 尾崎富右衛門於千代に面會の事  
并腕の佐吉恥辱を蒙る事
- 第拾貳回 阿武隈ヶ原大取合の事
- 第拾參回 郡役所裁決の事  
并 關長助須賀留備中守を狩殺する事
- 第拾肆回 關長助槍山奉行を討事  
并 關長助所刑綱五郎義死の事
- 第拾伍回 相馬大作縛に就く事
- 第拾陸回 大作妙見堂に須賀留を窺ふ事
- 第拾柒回 大作淺卿妙見堂にて須賀留家を駭かす事
- 第拾八回 大作味噌屋と成て須賀留家を襲事  
并 須賀留右京亮を炮殺する事
- 第拾九回 大作盛岡に歸り家續取決の事
- 第拾拾回 南部大膳太夫大作又對面の事  
并 南部槍山を取返す事
- 附 大作良助刑に所せらるゝ事

槍山相馬大作忠勇傳目次終

特10  
696

槍山相馬大作忠勇傳

第壹回 尾崎秀之助盛岡出立の事

八皇は一百二十代仁孝天皇の御宇時、執政徳川十一代の大樹文恭院殿源家齊海内尊望の鎮撫を仰ぐ時、天保年間將軍の城廓火災にて灰燼して御館造營の際に臨み兼て奥州南部領内槍山には數多の良材有る趣、上聞に達し在りければ幕府即ち南部家に令し數本の槍材を獻納すへき旨を傳ふに當時槍山奉行某槍材之れ無き趣を答て是を獻せざりしかば此時須賀留家より上進して南部の領地七十有余里の槍山を奪ひ造營の用木を獻せり是が爲るに南部の家門衰微を憂すに王る此期にいたり忠勇の英士あらわれ國耻を雪ぎ禍難を救ふ其原由を委しく尋ねるに爰に奥州若手郡盛岡の城主其高二十萬石南部大膳太夫侯の家中に家老職を務めし尾崎富右衛門が一子に秀之助と云者あり幼少の時より英才智慮衆人に踰て其性愛強まじく、鷹弱を助け強驕を挫くの機備り普く天下に其美名を輝さんとの大志を興し日外や好機會を得武術修行として廻國せんと晝夜思ひ暮しけるに一日父富右衛門世界全圖の畫圖を出し一子秀之助が前に置解て曰、倅此繪圖を見よ廣き世界の其中に我日本は他の國に比すれば一島の要め程なり然れども古より賢貴の人出て智識を磨き文武の道に敏し以に彼外我神國の勢威に恐れ容易に海内に鉾をよせず是我荊原の中國御裳濯川の後世に清流するもゑんなり殊に江戸表は各國の諸侯方參勤交代道路に縱横なし文武修行の人々多きは此地に住居を構へ互ひに擧て奇術を競是故に心ある者は皆敵地に至りて慈道を學ぶ者少なからず杯と種々東都の形勢を語りければ秀之助と云者余念なく聞いたりしが今そ日比の心願打明さんと思ひ父のまへに謹しんで申様私し未十三才の少年にて專の粗良も辨へずいへど

十も一慶江戸表へ趣き武術の道に心を委ね今南部の士輩衰情の眠を覺し且は日本に一個  
るの名器を願さんと欲す翼くがば父の許可を下し給ふ機願入候とアし上しかば富右衛門  
大ひは恐怖なしけれども子を見ると親に如かず其才智群に勝れし性を未見る所ありと思し  
かば快よく許し呉べしと思案を極めやう其方の願ひ莫大の望みにて感するに堪たりと雖  
も未だ十三才の少年にて武術修行の旅立などとは以ての外の事なれども斯まで一心と思ひ  
立たる事なれば遮るも余り詮なし汝が心底に任し遣はすべし去ながら江戸表へ始めて参  
る事なれば土地の勝手も不都合なるも山城屋方への添文を遣はすべしと筆を染さらく  
と書認め一封の手紙を渡しければ秀之助大ひに喜悅し二親に重ねて云様私し修行卒業の  
後迄は暫らく我を置き者と願念決して心遣ひ下されなと堅く勵まし置盡せぬ名残もそこ  
くに愛を省きし旅立も萬夫不當の器量の壯士なり父母を本國に残し父の手紙を懐中して旅  
の用意を盡へて吾妻の空へ急がんと古郷を跡に打木足に任して道芝の馴りくく三日にし  
て同國桑折の驛へ着せしが日と早や西山に没し夕暮近きたそがれ特秀之助は能き宿を求め  
んと尋ねて漸々伊達三右衛門と呼し宿屋へ泊りける偕て此家の亭主三右衛門と云者は此驛  
にて名高き侠客にて別に行ふ内職は制札の裏をく、りし手仕事にて自分が持土場を一軒設  
け其身は日々勝負所に通ひしが流石老体の加減にや此館は土場も五月細くなり子分腕の佐  
吉に萬事任せけるが爰に鱈口守吉鮫鱈の寅といふ兩人の惡もの日々此土場に通ひ詰しが此  
程三右衛門が立寄ざるを幸ひに土場を我所有のごとくに成し無法不理の振舞多ければ佐吉  
此事親分三右衛門に語るに三右衛門も憤怒しながら其儘打捨置たりける扱又秀之助は旅  
の勞れにてすやくと眠入しが其夜の四ツ時分と思しき頃不斗眼を覺し當邊を見れば是の

何に雲術ばかりの大男拔足の体にて秀之助が寐所の傍に置たる刀を奪ひ去らんとする有  
様なれば秀之助起上り直にかの盜賊を引捉へ膝の下に組敷て亭主くんと呼立れば主の三右  
衛門何事やらんと問へ來て見れば盜賊は我子の三次にて有りければ胸り仰天し語にいふ  
盜人を捕へて見れば我子也と今現在に見る事よと怒りの顔色滿面に現はれ俸三次がまへに  
進み出汝如何なれば斯る淺穢しき所業を爲や己れ其分にて置べきやと打擲なさんと有けれ  
ば秀之助是を宥め是には何んぞ深ひ譯も有べし先づく暫しと押鎮せ三次に向ひ其方が只  
今の爲体何故ぞや其譯を話すべしと問ひければ三次平伏して述ける様之此の驛に鱈口守藏  
あんこの寅といへる二人のわる者非道にも我父の持土場を奪ひ取りし故心外に存じ彼等二  
人を刺殺さんと思ひ夫也へ御差料を盗み申たり何卒高免下さるべしとの事の譯柄申述只  
管其罪を詫ひければ尾崎手を打て感伏しよさうなく人として斯たる性質之有度き者なり  
其氣前にめで、此短刀を貸與へいへば不義非道の惡人原存分に刺殺し召されと云しかば三  
次是又勵まされ勇氣猶も一倍なし左あらば暫し刀を拜借と其儘家を立出て土場をさし  
て馳到り様子如何と伺へばあんこの寅は宵の口より酒食に飽器具も徳利も打捨て前後正體  
なく大の字なりに寝入ければ是は屈竟仕済したりとあんこの寅を足よて蹴り起し立んとす  
るを只一刀に切り下げてなんなく首を打おとせり斯とぞ知らず鱈口守藏何か包を携へて入  
口瓦落離と引切て這入らんとする此方より一聲號んで突込む刀に横腹を刺抜れ血煙り立て  
相果は三次は無念を暗して悦び喜んで我家へ歸りけるが其夜も明て鶏鳴曉を告げれば  
秀之助は宿の掛ひを仕舞發足の用意致しける所へ伊達の三次出來りて秀之助之介に向ひ云ける  
様貴殿は是から何國くへ越しなるやと尋ねしかば秀之助我ら武術修行の爲江戸表を志さ

二十 して参るなりと云けんは三次は左あらば何卒下僕に御召連下され度御同伴仕べしといひければ秀之助も三次の器量未頼母しく思ひければ然らば御同道申べしと秀之助は三右衛門へ

二禮述て又三次は父へ別れを告二人の若者道連又て江戸表へと急ぎ行

第二回 中山幸之進馬術の妙を顯はす事并 戸坂の娘於千代秀之助を戀慕の事

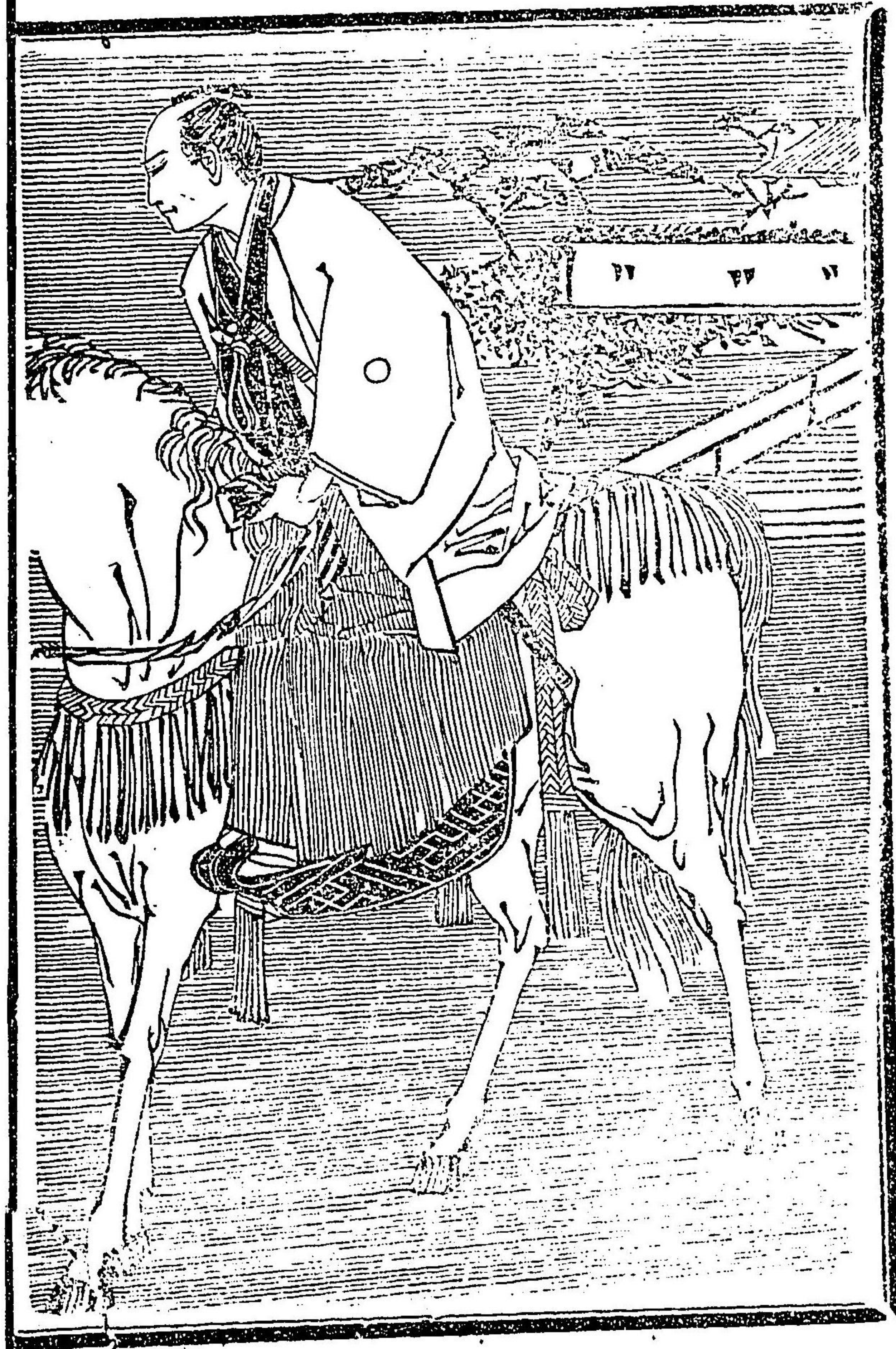
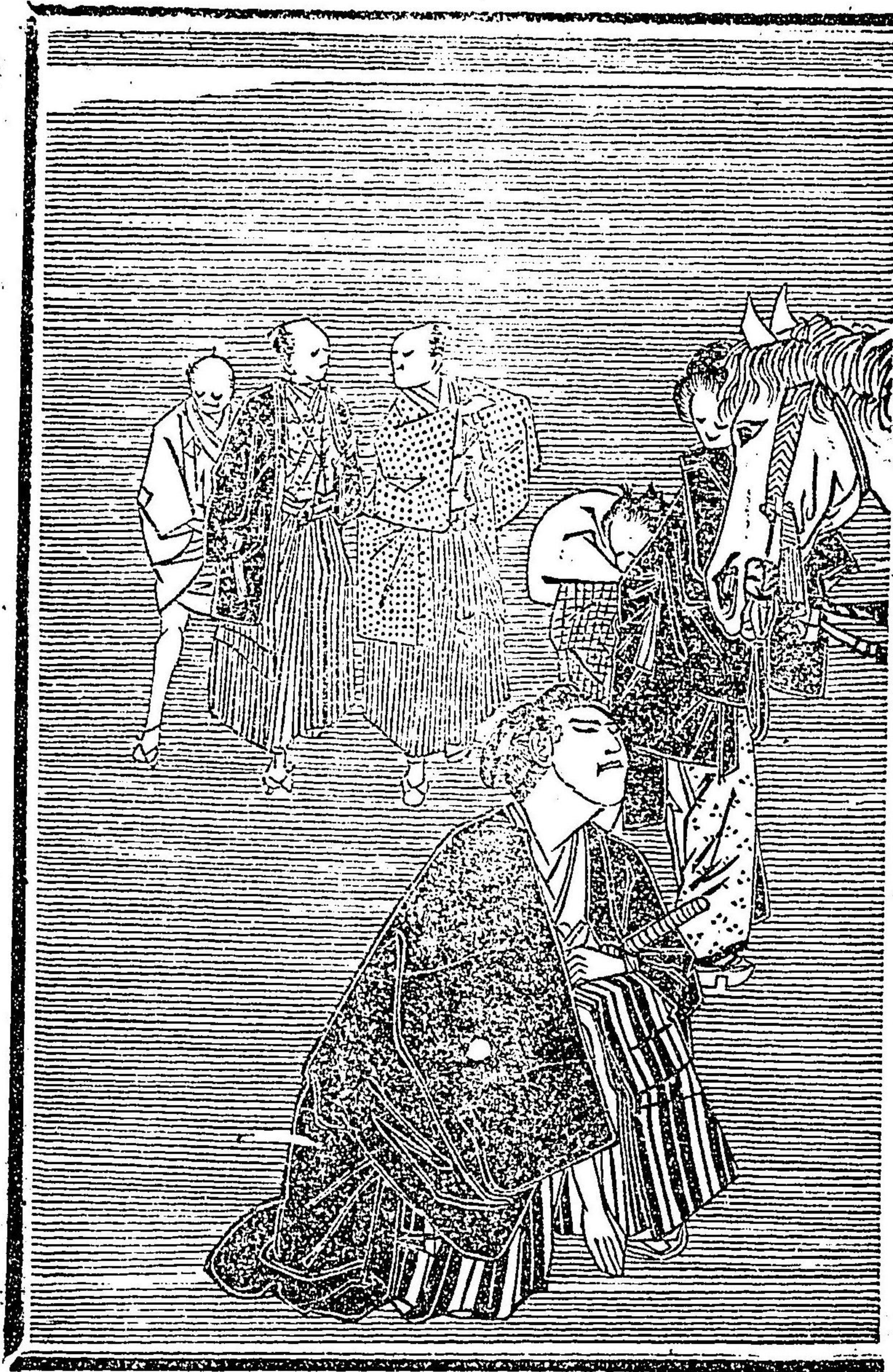
斯て秀之助三次の兩人數日よして江戸芝札の辻まで遠立しが秀之助三次は向ひ申やう我は是より能師折を撰み武藝修行すべき所存なれば貴職もよき師を求め上達致さるへし互ひに立身出世を期すべしと此所にて兩人相別れ又の再會をぞ約しける諸も秀之助は夫より本所松居町貳丁目山城屋武左衛門方へ参り父よりの手紙を渡し萬事世話を頼み申べしと有ければ武左衛門先手紙の封を切て讀ければ前年大恩を請し尾崎富右衛門よりの頼み状なれば是こく貴方が尾崎様の御子息に渡らせ給ふか何はともあれ先與へといざなひ色々饗應いたしけるさて此武左衛門は本締商賈にて廣く諸侯方へ出入なし江戸表にて名代の商家なり秀之助當家に凡五六日より逗留して名所古跡大橋に見物し今日は兩國橋の邊りを通り掛と橋向ふより立派なる侍ひ馬に鞭して飛鳥の如く馳來りまた此方よりは車力速めて詰の辻を曲る機會に車馬相對しあわや如何なるへさやと往來の人々脈を冷し見る中馬の上より有たる侍ひは手綱を後邊に引立を締めて身を捻れば馬は兩足上へ揚げ立止つたる其奇術に双方無事に行過ける此体を傍に見物してありし秀之助夫れにかんじ馬術の師を頼へきは此人なりと自分勝手に心を極めかけ行馬の後より一目散に附したひ行しに彼の馬上の侍ひは紀彥の屋敷の門口にて馬を止めて下んとするを秀之助は馬の轡を脱りと捉へ申様我社は南部の者にて尾崎秀之助と申者なり只今斗らずも貴方の馬術に感伏せり何とぞ不肖ながら今日よ

か門弟になし下されかしと頼みければ侍ひは見所ある者と思ひければ我家に入れ當時何れの宿を定めたるやと問ければ秀之助申やう宿は本所松居町山城屋武左衛門と申方なりといひしかば則ち人を馳遣り武左衛門を呼遣へ委細尋ねしかば武左衛門私し宿請仕は間門人にさし下されたと頼ける此武家は何人なるといふは紀州家に於て馬術を師範とする中山幸之進といふ人なり秀之助は先此家にて十五才の年まで朝から晝まで馬術を稽古し晝後より禮學射書數書など殘る所なく學ひ盡しければもいまだ劍道を稽古せざるをうれひ中山殿に依頼しよき師を得んと思ひ慕しけるが或日秀之助稽古の寸暇に裏邊に出てあたりを詠め居たりしに隣り屋敷にて竹刀の音が烈しく聞へしと耳敏て、伺ひしが案に違はぬ劍術の稽古なれば秀之助大ひに歡ひ能き師を得たりと中山幸之進を頼み親分にて隣り家敷戸坂記内と申へる方へと入門いたしける

因に曰く秀之助の如き器用の者が現在隣り家敷に劍道の師有を知らざるは不審な似たるも唯も左にあらす此戸坂内記外地に道場あつて是に稽古いたせしなるは此度我我家に道場を設け引越したればなり

三十 尾崎秀之助の仕合を見んと道場の方より見物して居たるが秀之助の風体さながら野鼻の如く頭上の髪は縮みて面色は黒く衣服着古く實に見惡き形さなれどもしつと辨し詠むれ





四十

は何處も美風を備へ自然と人品骨がら願はれければ二人の娘秀之助に懸慕ひ取分け姉のか千代之彌増て此節只ならぬ有さまにて晝夜臥床を離れず父の内記は大ひに心痛ををし其醫を迎へて療治を盡せども其しるしなし或醫のすには是は氣病ひなれば本人に得ど仍問ひ遊ばさるへしと教へしかば内記は乳母に申附千代が病氣の義を問吳よと頼みければ乳母か千代に尋ねしに全く秀之助に懸慕ひ氣病ひの山中上れば内記之聞て大ひに當惑し先秀之助に此事を明し何卒不東ながら姉娘千代を女房に持下されかしといろく頼みけれども元來大望ある秀之助なれば一朝一夕に請かはす宜しき返じもなかりしに爰に内記が門家に老弟子の山下嘉十郎といふ者あつて秀之助を一間に招き申けるやうは扱此たひは當家の娘子か千代さまが足下を懸慕ひしを親内記殿より足下に色々縁儀を頼み入れらる、も何か不足にて御否みなさるや又御身之忠義を思ひ仁惠を余ふし玉ふに今一命の危き婦女子を打捨らるゝは余り其意を得ず何卒この縁談を私に而じて御請がひ下さるへしと言葉を盡して申ければ秀之助は兎角に承知なく御邊の仰尤至極なれども我ら兩親の有身分にて容易く一巳の了簡に計ひ難しと云へば傍への唐紙押明て入來たる中山幸之進やう此度の縁談不佞か親師を兼て媒ち致すへし快よく請がひ下されかしと中山山下兩人が左右より責立れば秀之助も詮方盡て左あらは請かひ申へけれども私し未だ心願を果さす依て心願成就の後は實の婿煙はへし此度は只く彼の誓ひにて夫婦約束の縁を結ふへしとありければ此事どもを内記はヒ免か千代に申せしかば親子どもに悦びて後の縁儀を待よける扱秀之介には色々の事は少しも思はず只く藝道にのみ心を委だね修行怠りなかりける爰に三月彌生の節何れも國內裏離を祭るは何處も同じ嘉例にて内記の方にて悦びを賀しお千代は酒肴を

へ山下嘉十郎に持せ遣り夫秀之助へ響應なし膳を勤めける故秀之助大ひに歡ひ是を千代どのよりの馳走有難く頂戴仕るへしと箸を取んとせしかば山下嘉十郎府を進み謹でいふやう如何に秀之助殿此膳部か千代さまの馳走なるが君には如何思ひて食しめさるやと問ひしかば秀之助は打笑ひ是はく山下殿には異事をの給ふかな假にも女房か千代色の馳走其際切を悦び食する所なりと答へければ山下やう貴殿は此頃此様な女や酒食の榮耀ををし玉ふ時にあらず早々御思慮を廻らし給ふべし杯といへば秀之助一切合點かぬもへ山下に向ひ此秀之助は榮耀榮花酒食女に狂ひなど一切仕らず何故左様なる事を仰らる、やと尋ねしかば山下やう夫で御身は未だ國元南部の様子御存じなきや御國元に於ては此度將軍家の造營に付枝下三間直徑壹尺の檜木其數二百本獻納致すべき旨御達し有しに檜山奉行荒浪十藏治に依て無き旨を答へしかば此時須賀留家より仰の檜木を獻納仕るべしと上達せしかば將軍家より其方の領地に檜木有やの趣き御尋ねに成しに須賀留の答へには南部須賀留の境ひ較里にわたりし檜山南部の領分に有て南部の領分にあらず故に用達仕へしと南部領の山脈は登り八十三里が其間須賀留領の樺杭を建て奪ひ取たるよし此檜木山を取返す者は身より外にあらずと物語ければ秀之助おどろきかからさもなき体にて左様なる騷動有しや目さす相手は歴々の家柄なり高が知れたる匹夫の我らごとき者豈人位ひ何はと思へばとて及ひ絶たる事なりと一向取敢ず余所の事の様に申ければ山下も言葉よく立去りける扱も秀之助は山下には斯は答へしもの兎角よ本國の事が氣に掛ければ直檜筆を染し先女房七千代への離縁狀に内記への禮狀を添て一封とし又中山幸之進へは是まで永く大恩受し禮狀一封猶又山下へ懇切にいらく世話になりし禮狀都合三封の狀を中山宅へ殘し置其儘此所

八十 額足して相摸地さして急ぎ行

第三回 秀之助相馬繼現へ誓願の事并雀の宮にて須賀留を討事

去程に尾崎秀之助は相州足柄山相馬大現繼の神社にぞ来る（是は平親玉將門の靈を祭る將門は長將の子にて承和年中王家に反き貞盛秀郷の爲に廣島山に亡滅す故に此神古今の荒神なりとぞ）

則ち秀之助右の太股を切抜き神前へ供へ拜殿に頓首して心願を籠て曰く今般僕主家の爲に須賀留家三代まで殺誅を加へんと欲すあわれ希は神功の靈験を垂れて御力を添かして斬りける是より号を改め下總浪人相馬大伴と名乗る時に拜殿の中に人あつて此事を開世には能く似たることを願ふものもある者かと思ひ拜殿より卒と出此者を捕へ俱に須賀留を打の協力をなさんと聞と所を搜り見るに手にさわつたる衣服の肌かど掴み其事實を問んとせしが大作はすそ一大事を聞れたり顔見られて平ならじと振放して逃んとするに此方は袖を捕へて放さず互ひの力は袖はちぎれて此方はとつと打轉び大作と見向きもせずして馳行けり又此林股より出し者は何人ぞやといふに是奥州須賀留の名刀鍛冶にて國景の門人喜三郎國定といへる者にて七日前より當社に通夜せしなり何故へ國定當社に通夜せしといふに師匠國景須賀留家より守り刀を授へ呉べき旨依頼を請け心を盡して鍛ひ上し國景生涯に秘する其刀を授へれば此刀の差料に成し給はり度よし上しかば短慮にも大ひに怒り玉ひ直ちに國景を手打し玉ひしなり故に門弟の國定此無念を晴さんと思ひしをれども相手は何條大家なれば神の助力を假ではと荒神なる相馬社神に祈せしとなり因にいはいく相馬大作人に一大事を聞れながら逃さるは余り其意を得ずして此典に似た

りといへども全く左にわらす其身を懷達するまでは大切の體だ故に假令劍道の嗜みあれども萬計逃るに手なしと肝要の心意成べし

扱も大作は足柄山を立退き夫より諸々方々と懸廻る中に驍びみ清兵衛なる者の請人にて南部馬飼場の別當に這入り込元來大作は才智勝れし者なれば一ヶ年程の間は馬の飼養育て方の工合或は飼葉馬の洗ひなどを殘る方なく習ひ覺へ最早や是なれば何方へ別當に這入りし連も大槓馬の養ひ糧は出来るへしと思ひければ疾くも此處を退どき又もや江戸表に來り馬喰町武藏屋千太郎といふ宿屋へ泊り凡四五日余りも逗留し一日亭主の千太郎を呼すけるやう外の事にも有す其許に折入て頼度事あり當江戸表に中間別當の奉公に有付たひが何と亭主世話をして呉かしといろ／＼頼みければ亭主中根奉公と諸方に多く這入込み口が御座れども確とした請人がなひ時は何方の屋敷にも差入らず事相叶ひやすすと相譲りければ大作申やう然らば其請人がなき故に其許か請人と成り吳よ其代りに此金子と兩刀を汝に預け置へし若また紛れ事でも出来し其節は其金と刀にて事を相計かるへしといひしかば亭主さながら怒と道つれなれば是は手當物を以ての御頼みとは面白き仰かな如何にも世話仕るへしと直さま方々を尋ねけるに折よく爰に須賀留の馬部家より別當奉公人の穿鑿中故大作に此方は如何と尋ねしかば大作も須賀留とあれば望む處なる故に大ひに歡ひ直さ別當風の衣裳を着し假名を下総の秀吉となし須賀留の大部屋へ入這みける扱も大部家に飼ひ育つる馬は皆々悪馬斗りにて駿馬良馬とぞなく又飼餌も別當が減り取て十分と與へされば馬は自然と疲せ衰へて骨筋立て荷馬にも劣る計りの有さまなり然るに秀吉が部馬入してより以來良馬多分出來るなり秀吉は馬に飼葉を多く與へ又洗行等も怠りなく能晝夜を別たす養育なし

九十

十二 此の故實に馬は退くなり又外の別當等は一人持飼の馬五疋或は八疋なるに秀吉は一人に  
十 疋二十疋余りも持飼するもへ部屋頭大ひに是を感ける此事いつしか須賀留殿にも聞へけれ  
ば召れぬ傍別當に取立ありける憊て其年の八月十五日須賀留殿よ雀の宮まで遠乗りの  
催し有りければ大作は是屈竟の折なりと内心に深く悦び彌々日限明日と定まりければ大作  
馬屋より來りて殿の乗馬に飼飼をば與ふ日に白米を一搦み入置馬の爪を踏時足の裏をさり置  
きて翌日を今やくと相待ける早其當日に相成ければ殿には裝束錦織にまはれ鹿毛なる  
馬に打またがりわづかに供二人を引つれ下總秀吉先を拂はせ雀の宮迄遠乗りありしよ  
既に宮近く來る時に殿の馬は飼飼の利目にや供の馬より遙かに先立凡道法五六丁も隔たり  
ける此時殿の馬は自然と足の痛みを覺へ進み兼ねたる有様なれば別當秀吉爰なりとて馬の傍  
に近寄と見へしが痛みし馬の片足を骨も碎けと蹴上れば唯さへ痛みし其上に蹴られて何條  
たまるへさや兩足折て横様にどつと倒れて伏しければ殿はたまらず真逆さまに落馬有しを  
秀吉得たりと近寄て殿を一突めてければ其儘息は絶たりける此時は秀吉は素知ぬ体にて後  
供の侍ひに殿の落馬を申上ければ二人の從士大ひに驚き走來りて是を見れば最早息は絶  
しゆへ先殿の遺骸を屋敷へ引取病氣屈を爲し事濟けるが如何にも今日の始末下總秀吉傍  
に別當たりしが合點の行ぬ事ありし故馬の飼場を改先見るに白米少し残りあるもへ是正敷  
秀吉の仕業ありと直徳秀吉を呼寄種々と糾明に及び別當凡五十八斗り十重廿重に取巻て召  
捕んと致せしかば秀吉は事どもせず當るを幸ひ切立確立瞬間に數十人を打倒し一方を切  
抜て虎口を遁れ何處ともなく逃去りける

第四回 大作須賀留の乗物を砲發する事 并砂手渡し場にて須賀留を騒がす事

扱も相馬大作は須賀留の馬部屋を逃去り其翌日早天江戸市中所へ張紙をいしける

其文面に曰

今般須賀留多京事惡逆無道の舉動を行ひし故天又代りて是を誅戮する者は下總浪人  
相馬大作なり

右の如く所々に張紙有けるも須賀留の諸士等大ひに驚き人を馳せて張紙を取らせ憎き相  
馬が所爲なりと事はら詮論嚴重に致しける扱も相馬大作は江戸を退き信州神宮寺村高橋  
市郎右衛門が宅にて足を止めける扱も此高橋といふ人は信州一國にての豪富にして平常風  
雅の道を好み我裏に別に長家を建一藝の有ものを招き抱へ自身又百般の學術を試みて朝夕  
の樂しみと致しける大作此事を途中にて聞ては能便り所なりと假に又改名して江戸牛込  
店の畫師宗丹と名乗りて當家に這入込みけるが凡百日余りも逗留して空敷光陰を送りしが  
爰に此家の下男に三助といふ者の勸は依て山間へ小鳥を打に行けるが山々の景色を詠め籠  
の方を見て居たりしが一筋の街道あり大作三助に向ひ尋けるに此下に見ゆる街道は何れよ  
り何方へ通行する道なるやと有しかば三助答へけるは此籠の街道は須賀留街道なりと申け  
れば大作是を聞て心中に笑を含み先此日は兩人の者は立歸りしが大作思慮を廻らし夜分人  
の寢入しを伺がひ密に張拔筒の鉄砲を拵らへ人の入來る時は籠の下へ隠す手筈にして人目  
を忍ひ夜ななく怠惰なく張拔筒を拵らへ居る所に隔ての唐紙を引開入來る一人の男あり大作が  
然るに大作例の如く張拔筒を拵らへ居る所に隔ての唐紙を引開入來る一人の男あり大作が  
傍近く來る故大作手早く筒を懸して彼の男の顔を打詠めけるにかの者の申けるは他の貸座  
敷へ一言の挨拶も致さず這入し無禮の段眞平は高免下され度いなり併し只今傍へより伺が

十二

三十二

ひしにひ邊の手細工にて拵らへ給ふは全体如何なるものにもやと尋ね掛られ大作は勃然として大ひに怒り此奴無慮なる事を問ふ者かなまさか違へば討果さんと思ひければ一言半句の答へもせさりければ彼男猶も大作の傍近く進み寄て密かに語りけるやうは我は元奥州須賀留の刀鍛冶國景とす者の門入にて喜三郎國定と申者なり然に師匠國景は須賀留家の爲に御手打にわひ心外の余り去ぬる頃和州是柄山相馬神社へ心願を誓ひしに貴殿も同じく須賀留を恨み心願を誓玉ひしを聞しゆへ互ひに協力なして供に須賀留の恨を晴さんものと思ひしに貴殿は其時袖を振切て退去有しゆへ何卒して彼の内人に今一度廻り逢んものど所々方々を探り求めども一向相知れざりしゆへ唯今當家に於て對面致す事は全く相馬神靈の御引合せなり何卒此上は兄弟の誓ひを結ひ下されかしと心底を打明て又余義もなく頼みければ大作は此様子を逐一に聞き取左あらば其時に出逢たるは是下にて有けるやと此時互に打解て終に兄弟の誓ひを致しける時に大作申けるは唯今我等此張抜筒を拵へるは須賀留を砲撃せんどのした拵らへなりと語りければ然らば我も又刀に手をよせて鉄砲玉を拵らへ進すへしとて是より國定は刀を鍛ふそのに玉を隠拵らへ互ひに其用意に心を盡しける爰に又須賀留備後守どのには江戸表より御歸國の道すがらいよいよ今日柳瀬峠の麓をばり通行の躰ありければ大作國定の兩人大ひに悦び直様用意を整へ柳瀬峠をさして先廻りをなし國定は麓にあつて腰を打止しや仕損じたるやの實否を見止んと傍へなる木蔭に身を忍ひ居る又相馬大作は峠の頂上なる天狗の宿り木と名付し大樹に身を寄て今や來ると相待居たる所へ須賀留殿は數多の從士を召具し堂々として通行致され乗物の周圍には重臣守護をなし既に天狗の宿り木の順道に乗物の來ると思ひし頃大作は此期を外さずして討取んと鉄砲の現

三十二

を定め火門を切て打放せば彈丸山溪に響きて一發は先手の乗物を目かけて打抜ければ從士は大ひに狼狽なし儘に曲ものは山手の方よりなりと而々に手分をなして山の隅々草を分て搜ける此時大作は一目さんに麓に下り途中にて金比羅參りの衣類と自分の衣類と取換へ前に守り札を掛て金毘羅參りの風体にて道を急いで來りしが南部と須賀留とをかひなる神宮寺川の渡し場砂手といふ所まで遅延けるもはや大丈夫なりと少し心を休居たりしが向ふの方を見るに渡し守大勢打寄て何角喧嘩の挨拶をあする体なれば何事ならんと近付見れば盲目の女順禮を三人の侍ひ打寄て今や手打に致すべき有さまを渡し守是を託ひ致しければも彼侍ひども一向に聞入す渡し守も殆ど當惑なし居けるを是を見るより大作は人を押分け中に入りかの三人の侍ひに向ひて中ける子細は何か辨まへ申さすいへども相手之女の事なれば何卒勘辨なし下さるやう願ひ奉るとすければかの侍らひのいひけるは武士たる者の腰のものを汚し一言の言葉も掛す其儘に過行んとせしゆへ斯の有様ありといひければ大作はそりや御武家様には御無理のよふ存じ相手とすは高が知れたる女なり夫を兎や角仰らるゝは近頃以て不實の至り先々御勘辨なさるが肝要ありといひしかば彼侍らひ大ひに怒り汝卑賤風体を致しながら舌長なる方鞠く以て了簡ならず先汝から先へ打果さんと三人一時に力を拵持大作目かけて切て懸れば此方はじめれ者身をかかし打込太刀先事どもせず三人の侍らひを相手にして平らく挑み戦かふと見へしが大作圍敷三人ども礮打に終に神宮寺の川中へ投込たり彼の三人の侍らひども急流よて泳ぎもならずして終に水に溺れ一命を落しけるさて此侍らひ三人は須賀留の後れ供にて有しとぞ然るも大作は天狗の宿り木より此所まで遊のひ來り猶又爰にて斯様なる働らさせしとは實に大膽不敵の事なりける渡し守

の面々も金比羅参りの手並の程を皆々かんじけるとなり

第五回 大作須賀留を討取事 并 大作伊達三次面會の事

扱も此時相馬大作は彼女順禮の顔をつくく見れば是則ち戸坂内記の娘お千代なりければ大ひに驚きながら素知らぬ体にて順禮に向ひ申ける之其方も未だ二八の花盛りにてかよわき女の一人旅には何ぞ様子も有ふが定て國元には両親も兄弟も有りつらん斯様の事をばなさずして早々國元へ立歸り両親に孝を盡すが肝要なりと申ければかの順禮の思ひけるは何か心有けな言葉の端若や我夫にてはあらざるやと思へど其身は盲目の哀しさは顔さへ自由に見へされはしはしくしたる其体到大作尙も力を添重ねていひける様我等是迄來る道にて神宮寺村といふ所あり此所に高橋市郎右衛門といふ金満家ありて世上の難澁人を救ふと聞し故其方へ便り行へしと左も懇切に教へしかば順禮は一命を助かりし事何から何まで御深切なる御心遣ひに相なりひと大ひに悦び其儘愛を立退ける跡見送りて大作は悲歎の涙に暮けるが人目を憚かる忍ひ泣暫しは黙然たりしが川越どもは金比羅参りに向ひ申けるは侍々只今の如き悪侍らひ來り實に困し事なり貴公さまは急がぬ旅なればぐすり押へにこの砂手止まつて居て呉る心はなきやと大勢の者より頼みければ大作は元來浪々の身の上までさして急がぬ事なれば暫しの間此砂手に止まつてよき手つるもあらんかと思ひければ早速承知いたしける故川越ども力を得て金比羅くどぞそやしける大作は此處にて半年余りも足を止め須賀留の様子をうか、ひける然るに先頃柳瀬天狗の宿り木まで狙撃せし須賀留殿はまさしく鏡の櫃にて全く殿の安泰なるよしを聞無念ながらも空しく日を過しけるに爰に又須賀留殿は此砂手の渡し場を明日御通行是あるよしの前布令あつて八籍の正敷者を

八足に撰ひへきよし御達し有ければ大作は是を聞て大ひに歎ひ居けるが渡し守の森らは八籍の正敷者を二十人を撰み無籍なれども金比羅の頼みに依て此壹人を差し加へ都合廿壹人の人足揃へける備當日に相成ければ須賀留殿は數多の士卒を隨へ前を拂ふて砂手の渡し場へと御到着有ければ川越の人足等數艘の船を勧め就中金比羅を殿の召船に乗せければ大作は悦び勇み此期を外す討取んと専ら心を配りける船は既に神宮寺川の中央に至ると思ひし頃大作は此處なりと乗物を守護成ける四五人の侍士が持たる棹にて横をぐりに打ければ何條以てたまるへきや従士の者は眞逆様に川へはまるを見向さめせず殿が召たる駕の垂を引放し直様殿を小駈にかひ込川へさんふと飛込たり外の船より此有さまを見たる士卒ども大ひに驚きすは一大事と狼狽し曲者逃すな召捕と口々に呼わりければも名負此川は頗ふる急流にして其源坂東太郎よりながれ落る事なれば中々容易に飛込者もなく只船を漕付て水の中を毛槍竹竿を以て搜るのみにて知るへきやうもなかりける此時に大作は殿を水中にて刺殺し其身は川中に泳ぎ行き水中より頭を上て當邊を見れば一人も居らざれば陸に上りて衣服を絞りてある農家を頼み米を少々買求め是を喰し其儘此場を落延て何國ともなく立去りける扱も相馬大作は夫より鱒の銀山一の岨といふ所の頂上に登り此所に非人小家を建て徳利にて粥を焚須賀留の様子を伺かひ居るにわる日籠の方より俠客やうの者三人登り來りて親分と思しき者に二人の子分らしき者話しを致しけるやうは如何に親分此上の頂上に待伏して首尾よく奴をばらして御仕舞なさるへし及ばすながら我々も助勢致すへしと相談をしながら登り來りて大作の傍近く來て田葉粉の火を一吹貸吳よと手にく煙管を取出しける故大作は火を進すへしと手元に有ける芝を燃してサアくはあかりさるへしと

いひしかば錦々に煙草を吞けるにかの親分体の人と大作と顔見合し互ひに様子有氣に目くはせしてぞうつむき居たりける時此親分体の者二人の子分に向ひいひけると手前等兩人先へ行て是へ戻るか窺ひ吳よといひければ子分の兩人承知致したりと其儘先立至りける跡に現りし親分は大作が前に進みより身をへり下りて予けるは是はく尾崎様よふこと御無事て先は目出度いなり貴君は未だ御主の爲に御苦勞遊ばされし事誠に感じ入ひなりと予ければ大作は是を見るに思ひ掛けなき伊達三次なりければ御邊も無事にて目出たしと互ひに思はぬ對面に悦ひあるも道理なり伊達三次の中けるは先頃柳瀬峠にて須賀留殿を打給ひしも正しく替玉にて有し由然れども其御心痛の程我等蔭ながら案じ罷り居しか只今壯健の御姿を見る事の嬉しさよと落涙をして悦ひければ大作も俱に落涙を催しける扱大作のいひけるは併し御身は何故に此所へは來られしやと尋ねけるに三次の中けるやうと先頃江戸芝札の辻にて御別れ申てより江戸表にて千葉周作といふ劍道者の門人となつて長らくの間修行致し居りしに此間徳元より我を呼寄せの書狀到來せしゆへ早速歸國致し様子を問へば此度我父三右衛門莫大の金子を勝けるに景清の源太といふ者は憎み父三右衛門の歸る所を待伏して殺害せしなりと聞て恠り其敵を討んと存し桑折の驛又有て様子を伺かふ處に彼の源太といへる奴今日阿古屋腰掛松へ行歸る道と此山を通る由を聞き故此所に待伏して討取へき手筈なりと子細を委しく物語ければ大作も氣の毒に思ひ扱ふ夫は御心勞なるへし我等も俱々助勢致すへしと此話しに暫らく時をぞ移しける

第六回 伊達三次景清源太を討事 綱五郎土場へ立寄事

斯る所へ二人の子分立かへり只今景清源太此所へ來るなりと注進致しければ三次は大義な

りといひながら腕の佐吉と鷲の熊五郎の三人は木蔭に各其身を忍ひつゝ今や遅しと相待ける斯とぞ知す景清源太は青鬼の清吉阿古屋の松其外に二人の子分を引越山の手邊より頂上さして登り來る待設けたる三人の荒もの木蔭より飛んで出三次は源太に打向ひ父三右衛門が敵悴三次が向ふたり思ひ知れよといふ儘に刀を抜て切付る源太は不意の振打に膽を潰し周章ふためきながらも流石は我慢不敵の者どもなれば負す劣らす切結ふ傍への小家に大作と此休を見て居たりしに三次は源太と渡り合腕の佐吉は青鬼清吉と鎧を削る鷲の熊五郎は阿古屋の松と斬結ふ然るに源太が子分外二人の者は手明なれば動もすれば三次の後ろへ廻り切付んとする有様なれば大作は之を見兼て飛んで出二人の子分を追ひ散す此隙に三次は難なく源太が肩先より胸板かけて切下ければ何條以てたまるへき虚空を纏んで相果ける此有様を見るよりも清吉松の兩人はかんじんの親分を打果され何を自當と争はんやと放々の体にて逸失たり三人の者大ひに歡ひ勇みけり扱も三次は非人又向ひいひける様手前もよくこそ加勢を致し吳たり斯様なる物淋しひ山中に居るよりも寧ろ我等が宅へ來りなば飯や肴の残りものは多分あるから先く我等が住家迄來るへしと云しかばかの非人大ひも悦ひ左やうならば親分御厄介に相成るへしと是より三人の者非人を同道して桑折の驛へ歸りける扱も伊達の三次と相馬大作を表向は非人と見せ掛け萬事に心を配り隠匿ける時其場を延延たる清吉松の兩人は源太が宅へ飯りて此事を女房に語りければ女房大ひに歎息していひけるは手前も親分と同道して居ながら親分の殺さるゝを見捨て歸るとは余り不人情なる致し方なりと怒りければ二人の子分と其言わけに困りける女房は斯ては果しと我兄たる身川の驛にて目明しの張本壘や直右衛門に頼み何卒夫源太の敵を討て下さるへしと頼み

八十二

しかは直右衛門のいひけるは元來源太が非道を行なひ罪ある三右衛門を暗討にせしゆへに斯る騒動の出来せり此義は打捨置へしと一向取敢されども妹は押て此義を顧みけるもへ流石は兄と妹の間柄もへ詮方なくも然らば討て取すべしと請かひける然に此直右衛門は自分の子分三百人源太の子分百人あり都合四百人の同勢よて日限を定め桑折驛なる伊達三次が方へ押寄へきの結構なりと噂早くも三次方へ聞へければ三次の方にも夫へに子分をわつめ土儀と疊を以て専はら防禦の手當嚴重に怠りなく構へける爰に又關東の三俠客の一人此關東の三俠客といふは國忠忠治大目此中信州の住人信夫の常吉此大喧嘩を開懸へ直様馳來坂の榮五郎信夫常吉三人を言りて双方の挨拶を致し先へ無難事をして治先ける其中直りどあつて阿古屋屋腰掛松にて花會をひらさけるか此事を聞よりも近郷近在より我もへと見物に来る者夥く爰に又三盃の驛に井筒屋清兵衛といふ造り密油屋あり此家の印は丸に田の字の印にて多く江戸積を盛大に致しける然るに此家の番頭綱五郎といふ者あり今日得意先の懸を集めて戻り來る其風俗は奥編の若物に小倉の帯をしめ白足袋は滑草の雪踏をはき腰に矢立帳面杯を提げ財布を肩にかけ靜くと歩み來り又其方より來か、る者は同じ家に入出入する仲仕頭の源吉といふ者なりしか互ひに顔を見合して是はへ綱五郎様何所へ御出なされしやと尋ねけるに綱五郎も是は源吉殿我等は只今懸を集めて歸る所なりといひければ左やうにていやはと然し貴方の肩に乗せてある財布は大分重いやうで御座りますといひければ否へに謙かに參百兩ばかりなりと答へければ源吉は憫れ果ていひけるは貴方また、いふ井筒屋のお躰さまと御入魂も入らつしやるから三百兩や四百兩の金は自由になさるもへ謙かに參百兩で御座ませうなど、いやみたらへ云散し時に綱五郎さま今日は阿古屋屋腰掛松に花會か御座りますか御

九十二

見物と如何にいやはと進めければ綱五郎は生花の會ありと思ひしもへ左あらば建立すべしと二人と同道して阿古屋屋腰掛松に來て見れば數多の見物山の如く綱五郎は奇偶を争ふ花會なれば案に相違し立歸らんと致しけるに源吉は思ふ子細もありしや無理に引止めずけるは折角爰迄來りて歸らんとは余りに其意を得ず先々五六番の勝負を御覽なさるへしといひけるに綱五郎も元來此道は好なれども此節思ひ切て一向に手出しもせさりければも今源吉の勸めに依て是非なく見物致し居けるが向ふの場所を見渡せば數多の俠客居並て中も一際目立て信夫の常吉が居たりし場所と見へ綱八丈の大蒲團を敷あり又右手の方には伊達三次が座を構へ左の方には疊屋直右衛門が座を構へたり其外子分一統連列りて座しにける又三十人の者ども車塵に圍居し奇に偶よと勝負さの中なりしかば綱五郎に鳥渡と手出しは如何にいやはと勸めければ綱五郎此時迄は恨み居たれ共素より好の道心の移りし折あれいりにも承知と肩なる財布を取て投出すと是を皆詠めるに素人の事なれば聲を掛全休此金と何程有やと尋ねしかば綱五郎のいひけるは多分の事ではなし謙かに三百兩とかりなりといひしかば並居る人へ此奴大分に驕の太き奴かなよき鳥が掛りし口には出てねど各目顔で知らせ合何か勝負の事に付き勝か言葉のひかけよりついにけんかとなりけるを右手の俠客は如何致すやと三次の顔を打詠笑を含みてひらへ居る又三次も彼の素人の者は如何為やと互ひに笑ひ顔をなして居たりけり

第七回 綱五郎青鬼の片腕を切事 綱五郎井筒屋を退く事

初も勝負場の悪習として偶々素人の立入るときは種々様々の手段を構へ勝負を暗着して暗中の金を掠取は此徒の仕業なれば今日しも綱五郎が勝利に成しを狂て其金を奪はんとせしよ



十三

綱五郎勃然して云けるは如何に産屋是は昔の引籠又耳の垢を浚て能開べし頃之寛治の年  
十間陸奥に安部の貞任宗任兄弟の三人を起し八幡太郎義家其父頼義の兩將の爲に戦かひ  
破れ弟の宗任は都に引れけるに衆卿陸奥は片郎なる故に梅の花も知るまじと宗任に恥辱を  
與へんものと梅の一枝を持來り此花は何といふ花なるやと問けるに宗任の即答に  
我が朝で梅の花とは聞つれど大宮人はいかいふらむ  
斯のごとく詠しければ公卿方かへつて恥を請し事ありとか我等勝負之事はしらされども何  
ぞ一二をわさまへざらんや素人と思ひあなどりて能くこそ人を馬鹿にせしやと云つても一  
刀を抜放して青鬼清吉が片腕を水も溜らず切落しければ有合人く大ひに驚き膽を潰して  
騒ぎ立振たくと段く彼の奴を打やぶら延せど土場の下に隠し置たる棒追取綱五郎目  
懸て打んとするを綱五郎事どもせず尻を据て胡座をかきお、打る、者なら打て見よと恠と  
もなきぬ器量の若者勇ま敷社見へにける此時伊達の三次大音にていひけるは其の客人を打  
は打よ此三次が相手だから來れ小わつばと立上れば直右衛門の子分の者ども相手は三  
次と有からは面白き事なり打よくと動乱す此時奥の一間に居たる信夫の常吉此大音に馳  
來り事の起りを尋ねければ全く青鬼の清吉が非法の由にてありければ又もや常吉の中裁に  
て事を無事に治めけるが先綱五郎は三百兩の金子を元の財布に納め源吉と同道にて静く  
と立歸りける是よりして綱五郎と評判高くなり青鬼清吉の片腕を切たるより人呼で羅生門  
の綱五郎とぞ言讚しけるまた三盃へ驛なる造り醬油や井筒屋清兵衛の女房おわくといふは  
此家の内娘にて清兵衛は娘お國を連子して此家へ養子に入込し身なれば女房おわくは何に  
つけ我ま、の氣隨をおこしけるが自分の先夫の子に國五郎といふ者あり是どお國と女夫に

一十三

なさんと思ひしが此屋より綱五郎とぞ言はせうやら割とき中と察しければ綱五郎を追出  
さんと思ひ居しに此頃綱五郎の噂さ高く羅生門といふ異名を取し事を小耳に狭みし故何日  
て其實事を探んと心を煩はせけるにある日下女に中付仲仕頼の源吉が宅に遣はし此頃夜  
分甚だ騒なる故誰ぞ丈夫なる者を一人泊り番に遣はし呉へしと申けるに此節假令何程  
物騒にもせよ又用心悪くとも井筒屋の内にては一切心配なし然し羅生門と云んとせしが  
口を閉かつといふまいと竹氣なく左様ならば今晚より泊り番を遣はし申すと又付下女  
は宅に歸りて源吉さんが羅生門といふ者が有から大丈夫なりと申されしと告ければ扱はお  
わくは直様源吉を宅へ招きて申けるは只今其方が宅へ下女を遣はし泊りはんの事を頼まし  
どき井筒屋にけ羅生門が居るから氣遣ひあいといふたそうだが全体私が内にて羅生門と云  
は誰の事なるやと尋ねけるに源吉は中く左様な事は申さずといひければおわくのいひけ  
るは其方は包み隠しを致せしなり此事をいはん又於ては今日よりわしが方へと出入は差止  
すべしといはれて源吉たまりかね實は其羅生門と申は當家の番頭綱五郎様なりと語りけれ  
ばおわくは此事を清兵衛に告げ行を働らぬ綱五郎を早々追出して御仕舞なざる可と無理に  
突込けるが清兵衛は此事を早くも知り居たれどもおわくの耳に入るまでは包み居たりし  
に今更云ひ出されど詮なく清兵衛は綱五郎を一間に招き申けるは其方事永くの間我家  
に在勤を致し呉し事實に悦ば敷存するなり然るに女房おわく不斗した事より其方の所業悪  
敷を云立追拂ふべきと申せども我は固より其方を伺までも置たく思ひければ女房おわく  
は家女にて我は養子の身の上なれば何に付ても云隠れ心外には思へども詮なく依て其方  
一度當家を退ぞと呉べし是は少しの金子なれども籠中の籠用となし呉べしと金子十兩を

二十三

逃出しければ綱五郎申けるは御心遣ひの程有がたくいへとも我等首尾よく御奉公致せしなれば此金子を頂戴仕りしらへとも悪行を行ひし此綱五郎壹錢の金たよ頂戴致すへさめわれ是なくいと差戻しければ清兵衛は大ひに感し左あらと是は持返り吳よとて壹ツの箱を取出し綱五郎の前に差置ば何品成やと綱五郎蓋を明て是見ればこは如何に根からふつ、りと切たる島田番法はと煮ろく綱五郎清兵衛重ねて云けると髪は生もの身と大事娘の心を察して往末永く添送吳かしと流す涙も子を思ふ親の恩愛左も有へし流石に猛き綱五郎も暫し涙に呉れけるか清兵衛に向ひて申けるはこは有かたき御心遣ひ我も一旦御嬢様と御目を忍び不義の契を結しからは此綱五郎の存命中は何をか以て見捨や可やと云かは清兵衛は大に悦び互ひに盡せぬ別れをなし綱五郎はかの桐の箱を携て其隣井筒屋方を立退けるか心さす其所は桑折驛なる伊達の三次を尋ねんと五六丁來るとき後の方より呼聲に振返り見れば仲仕頭の源吉か一目さんに馳來り綱五郎か袂に縋り此度私しが口走りしより罪なき貴方を斯様なる目に逢し何とも譯なし何卒御勘辨下さるへしと涙を流して詫ければ綱五郎は否く何も手前の仕業にあらず全く我が悪行より起りし事決して人を恨みやさす金子五兩を取出し其の方は迄我等を種々氣を付て呉た故少しなれども是を進すべしといひければ否く是は勿体なし貴方と旅の御身故何程有ても入るものなり御心遣ひは御無用と押返せば綱五郎我ら五兩や十兩の金には不自由致さす是非く納免置へしと無理に金子を源吉にあたへ桑折の驛へと急ぎ行ける

第八回 井筒屋家内騒動の事

扱も羅生門の綱五郎は伊達三次を尋ねんと桑折の驛まで來りけるよ流石俠客の事なれば直

三十三

に有家も分りし故綱五郎先案内を乞ひ三次に面會して申けるは我等過日阿古屋腰掛松にて初めて親分に面會致し貴君の倭魂ひを慕ひて日夜忘れず翼くば親分の子分になし下さらば此上もなき仕合なりと餘儀なく頼みければ三次のすよふ是はく綱五郎殿には何をすさるや我等より遂に氣前の勝りし貴殿中々子分なぞとは存じもよらぬ事なりと斷りければ綱五郎是非なくして左あらば兄弟分の誓を結ひ給へかしと頼みける故三次は最早や斷はるに術なく左あらば御有意に任せ兄弟分の盃を致すへしと子分にす付酒肴用意を致させ奥の座敷にて互ひに盃を献酬なし子分にも以後綱五郎と入魂に相成べしと堅くいひ聞せ自分と兄弟と成て暫し酒宴を催しける早酒も闌なはとなりし時三次は相馬大作の人相書をとり出し綱五郎が前に置申けるは此書姿は此程より樽さの高ひ相馬大作といはる、者の人相書なり此者を召捕へ御上へ差出しなば二百兩の褒美金を給はり其上二百石の侍らひに召抱へるどの事なるが何と綱五郎一番此者を召捕能手柄に有付度思ひしが手前は如何思ふやと尋ねけるに綱五郎大に呆憫果顔色變じて云ける、う此綱五郎の目が昏んで有たりしや此様な小心不義の三次とは知らずして見損ひたり夫に兄弟分杯とは馬鹿く敷と悪口を罵り此様な處に長居は無用なりと立出んとするを三次發を掛けて綱五郎暫らく待べし其心底を見る上と打解て手前に話すとあり先々立歸るべしと引止子分の者を遠ざけ時に綱五郎足下は此相馬大作を其まで思ひ居るかといへば綱五郎中侍らひたる者は君に忠を盡し義を全とふするを以つてまとする此大作杯は主家の爲に一命を投うら粉骨碎身の勞を盡す是忠勇兼備の英士といふべし我ら身不肖なれども斯様なる人の爲に命を的にして一番助勢をしたしと勇敢き其言葉に三次大ひに感入手前が斯る心底なれば唯今一大事を明すべし實は我家は

四十三

相馬大佐隠態有然れ共手前の心を探らん爲斯はアせしなりと有の儘に物語りければ綱五郎  
さて左様にて有けるや我等いさゝか助勢を致すべしと言葉の下に唐紙引明入来る大作は  
綱五郎の眞進寄申けるは未だ一度の對面もせざる足下の斯迄我を思ひ下さる段身に取て  
いか計りか忝なく存するなりと大ひに悦ひける綱五郎は音に聞し相馬大作は眞殿にて  
有けるや此上ながら御入魂下さるへしと有ければ大作大ひに打解三人とも終日酒宴致しけ  
る爰に又井筒屋清兵衛の女房おわくは江戸表より急用なりと清兵衛を欺き出し扱其跡にて  
國五郎とおくよと祝言をさせんものと若ひ者喜助と云者に金子を與へ主は清兵衛を途中  
て殺し呉べしと頼み遣はしける也へ喜助は清兵衛に追付んとて道を急ぎて行けるが八町  
の松並といふ所にて出逢物ともいはず切て掛るを清兵衛と大ひに驚ろき逃延んと致しける  
を此方は透さず引捕へ今や打殺さんとする所へ通りか、りし伊達の三次かの惡者を取て投  
捨提緒にて引括り清兵衛を救ひて惡ものを責上げければ是全く井筒屋の若ひ者喜助にて有  
ければ清兵衛は驚ろき惘れ果てぞ居たりける三次は猶も責上げ何者に頼まれて斯る惡事を  
爲すやと尋ねられ喜助之苦しさに堪かねおわくがいひ付にて猶また密夫をなし藏預りの松  
兵衛を内へ引込國五郎とわくくの祝言をさす事迄て悉く白狀致しけるゆへ伊達三次は先清  
兵衛を始め惡者喜助を我家に連れ歸りて井筒屋の様子如何と窺ひける扱も井筒屋に於ては  
おくよと國五郎をば婚姻させんとて彌其日に相成ければ料理拵らへて出入の肴屋に付付  
婚禮の用意を調のへ又國五郎は入湯をなし下女三人にて練袋よて物體を磨立なしけれども  
何分國五郎の顔と金物やといふ顔付にて眉毛は鉄さふ目は眞鍮鼻と獅子口は銀口齒は出齒  
なり下女は國五郎をいろくおたてそやしける又仲仕頭の源吉は井筒屋方よて婚姻の次第

五十三

を逐一綱五郎へ注進なしければ綱五郎此趣きを三次清兵衛に語りければ取分清兵衛大ひに  
怒り居りしに井筒屋方にはおわく娘お國を一間にまねき國五郎と婚姻の事を申しける中  
はや料理もど、のひ島臺式の餅りもの美々敷並べ立ければお國は驚ろき涙くみてやける此  
事父上にて御承知にていやは假令又左様にもせよ父上の留主の間に此様なることをなしては如  
何なる御怒りの有る計りがたし何卒父上御歸宅にて御計らひ下さるべしと申せしかばおわ  
くのいふやう清兵衛どの、承知なしにかよふの事が出来るものか斯様なことを案じすとも早  
や祝言致すべしといやがる者をば無理引居すでに、盃を取替せんとする所へ下女持來り  
たる祝ひの進物何方よりとも下に名當はあく何品ならんと聞き見れば是之如何に桐の箱に  
て中なる物は島田の留おわくは不思議に思ひ何人か此品物を持來りしぞと尋ねけるに一間  
の中に聲有てヤア其進物は我よりなりと間の唐紙押分て入来る綱五郎其進物の代りとして  
其方の白髪首を入べしといひければおわくは大にいかり誰かき思へは其方は番頭の綱五郎  
なるや唯今の悪口雑言扱之其方主を殺す氣なるやといひければ綱五郎成程手前を殺すのだ  
番頭の綱五郎杯とは片腹痛し此家に奉公して居る時は主ともいはん又奥様ともいはん今斯  
暇を取て出た 曉は主でもおし家來にもあらず余りの口廣き事をはさくべからず全体己は  
腦太き事を致す奴なり此綱五郎が成敗を思ひ知れよとおわくの警引掴み引すり廻して横面  
をこつしと斗りに打叩き今や捻首にも爲んどせし折柄先綱五郎早まるなど入来る伊達三次  
主人の清兵衛兩人を見るよりおわくと仰天なし惘れ果てを居たりける三次おわくに打向ひ  
其方は道ならぬ事を働らく奴なり現在に夫の有身の上なる又密夫をなしける事言語同斷不  
埒の至りなりと白眼付けければおわくは其様なる事身に取て聊か覺へは是なしといへば三次

六十三

は其方いふ程包み隠すとも最早叶とす又其上に清兵衛殿を人に頼んで殺さんとせし事曾々  
明白に相知れたりとくく白状をなすへしと責立れば強情の深き邪智女也へ中々一應にて  
白状を致さぬもへヤアく其細付を是へ引へしと呼はりければ子分の佐吉心得たりと臆  
りの若ひ者喜助をば引すり出して是にても其方覺へなきやと責付られ最早包み隠すとも兩  
人が出たからは遁れすとや思ひけん事の顛末を一々に白状致しければ清兵衛はおわくも向  
ひ其方の命を取へき奴なれども格別の情を以て命は助け取すへしといひ又松兵衛始め喜助  
も重くの悪行なれども是又情を加へ命を助くべし早く此家を立去るへしといひながら  
重ねておわくに申けるは國五郎には當家の相續を致さすへしと情ある斗らひに三次を始め  
綱五郎も俱に清兵衛の慈悲を感じける早三人之罪人のごとく尻を打たれて追出され放く  
の体にて立出ける跡に清兵衛國五郎を呼寄其方之當家の跡續致さすへし又おくは綱五郎  
と不義せしもへ是は勘當付付べしと塵も洩さぬ取捌きに智く是を感んじける情もお國は  
勘當を受返つて其身の仕合せなりと思ひ戀れし綱五郎と世間暗ての女夫となり十三荷の荷  
物をと、のへ雲助哥よて桑折の驛へと縁付きにけるが三次の内にも女夫連れは嵩高なりけ  
れば其近邊にて一軒の家を借り受是へ女夫を移しけり

第九回 お千代砂手にて艱難の事

爰に又相馬大作の女房お千代は砂手の渡し場より一里半斗りも来りしに砂手といふ驛あり  
今宵は此處にて一宿せんと小泉屋源次といふ宿に泊りけるが此家の主人源次の思ひけるよ  
ふ今日我宿へ泊りし盲目の願禮はすこふる美人なり彼の女の眼を療治して遣はし全快の上  
能金の手藝にも有付んものと思ひしかばお千代を濃厚親切に愛應しある日お千代に向ひ

七十三

いひけるは此隣家に能目醫者ありお前の眼も生れ付ての盲目とも思はれす彼の醫者に懸つ  
て見る氣は無やと尋ねしかばお千代は大ひに悦び其様なる能き醫者の有ければ何卒お世  
話を頼み申べしと有し故へ源次は直に此醫者を向ひ心を盡して看病しけるに流石に泣涙し  
たる眼なれば凡三十日懸りにして眼病速かに平癒しければお千代は此上も無く悦ひ源次  
に厚く謝し夫より五六日も打過ある日源次に向ひ誠に永くの御厄介に相成りゆひしが今  
日は出立致し度存し候故へ一先づ御勘定下さるべしと申付夫く事に相濟けるゆへ源次の  
いひけるは今日は初立の事なれば我等道迄でも送り進すべしと有ければお千代は色々是ま  
での深切に預りし上勿躰なしと辞退すれども源次は強ひて送るといふ故へ詮方なく同道し  
て砂手の奥山に至りければ源次は爰ぞと人の通行なきを幸ひお千代をどらへ無理無躰に強  
姦せんとなしけるもへお千代は大ひに驚ろき逃んとすれども源次は放さずしつかと捕へ其  
儘お千代を押し倒し既に強淫に及んとせしかばお千代之一生懸命にて大聲を上げ人殺しく  
と呼叫ふ源次は構へず此奥山へ誰が来るものかと乗掛らんとする所へ北の方より綱代の駕  
を昇りて登り来り雲助と此体を見るより駕に乗りたる者にいひけるは親分合点で御座るか  
と駕を下しければ中より出たる一人の出家物をもいそす源次が首筋引掴み廻ぐと見へしが  
とつかと投付其駕源次の衣類を剝取赤裸にして藝を以て松の木に縛り置其駕にお千代を乗  
南を指して昇て行跡に残りし小泉屋源次は人殺しなりとわたり立けるに爰に又一人の  
俠客体の者此所を通り掛りし山賊の類旅人を惱すならん助け呉れんと馳來つて是を見る  
て一人の男松の木に縛られ居りければ先藝を解遣はし其様子を尋ぬるに源次申けるは私し  
と旅の者にて此山を通行致せし所山賊の爲金子を取られ刺さへお千代といふ私しが妹を勾

八十三 引かされ斯の通りの仕合なりと實らしく言葉を工みに述べれば彼の俠客いひけるはして其  
十 曲者は何國へ行しやと尋づねけるに唯今南を指して行しとすける故左あらば其妹を取り返  
し遣はす間我らに付て來可と跡を慕ふて追懸行に彼の出家お千代を山の林に連れ行兩人の  
駕昇に手足を持せ己れはお千代の上に跨り今や強淫せんとの有さまを遙かに見て取彼俠客  
一目さんにかかけ來り矢庭に出家を引退けて一刀を抜切かければ僧も同じく抜放し受つ流  
しつ切ひす此方源次と二人の駕昇を先途と打合けるお千代は又も此人惡人なる哉  
り難く思ひしゆへ此隙の隙を伺がひ元の砂手の驛へと逃て行此特彼の俠客の太刀や増り  
けん終に出家を切殺し谷間へ蹴落しけるに又源次と駕昇二人を打倒し互ひにはつと一息突  
俠客のいひけるは手前の妹が居らぬといひければ源次は氣が付是も如何もお千代をば逃  
せしと先俠客に一禮を述べ私しは是より妹を尋ね候故是にて御別すべしとて双方は南と北  
とへ別れ行く借も源次はお千代の行衛を尋ねんとて先砂手の驛へ立歸りて方々を尋ね聞し  
は其女は借に大黒屋藤兵衛方に泊りしと聞源次は大に悦び大黒屋方指して至りける

斯てお千代は砂手の驛に逃歸り來りて先大黒屋藤兵衛といふ宿へ逃のびあると藤兵衛は奥  
山にて難に逢し事を逐一語りければ藤兵衛中ける様夫は定めて御難義成れしならん併し  
我等が方にて御泊り有ば左様ある氣遣ひ一切是無しと力を添へお千代をば雜用部家へ案  
内を致しける然るに小泉屋源次も亦當家にて一泊を乞下女の案内にて二階に通じ暫らく有  
て入湯に行戻り掛に彼のお千代當家にて何れの間居るやと問毎くを見て歩行しに不斗  
一間を差覗き見るにお千代は當家の亭主に二百兩の金子を預け居りし所を源次密と見留た  
れども素しらぬ振にて其他我間に立歸り暫らく有て藤兵衛が帳場へ居傍らに出來り源次い

ひけるは如何に三ヶ月藤兵衛久し振だなど聲を懸れば藤兵衛は是はく源次じやなひか  
何用有て我家には來りしぞと尋ねるは源次のいふよふ手前今日は味ひ仕事をしたなどいふ  
に藤兵衛は眞似面にて味ひ事とは全体何の事なるやと云ければ源次のいふやう知らぬと思  
ふか今一間の中よて女順禮より金子二百兩を預かつたであるふかなあの順禮之我ら三十日  
も前より色くんと手を盡し能仕事にせんと思ひ今日順禮が出立を送り奥山にて仕事よせん  
と致せし所止賤どもに妨げられ彼女を取逃したり依て此金は己も分口をして二ツ山にし  
て呉べしといひければ藤兵衛の思ひけるは惡ひ奴又見付られしなり此方に見付られては地  
獄に佛た滅多見逃す事ではないから如何にも分口は致すなり併し此方に一ツの頼み有り余  
の義に非ず今宵夜更なば彼順禮の兼問へ忍ひ込刺し呉べし左も無時之我等の惡事の顯は  
る、也不便乍も順禮を手に掛け死骸をば奥庭の飛石の下へ埋め置跡の厄介ならざる様致し  
双方安心して其上にて百兩の分口を手渡し致すべしといひければ源次は尤もなりと早速是  
を承知して二階に上り夜の更を待居たりける

第九十三 第拾回 喜三郎國定お千代と名乗違ふ事 并 三ヶ月藤兵衛發心の事  
扱も此家のあると藤兵衛は下女のおよしを呼て彼二百兩の金を預け借云様はおよしやモウ  
大概にて我が心に隨がふてもよかりそふなものじやないかと云しに自由のやけるは貴方は  
當家の親旦那の事故中く否みはアさねと若旦那の藤太郎様私しをばいろく御口説な  
る故誠に迷惑を致しける上又く貴方さま左様に仰せられて至極困々申べし此事計りは御  
勘辨下され度しといひければ藤兵衛は悴位ひの云事を頓着せず私しが心に隨がふべしとい  
ろくく口説にぞおよしは此主をば討らんものと思ひ私しかば此時漸く承知して在あら

十四 ば今宵寛く御話しをすべし併し旦那様先程私しは立聞をして居りましたら源次様とやらに金の分口をなさる様子彌く誠になさるか尋ねに藤兵衛相手は名うての源次なりとも取すには濟すまじといひければおよし申けるは旦那大分淺智恵なり金子をば渡さすとも能事あり私しは夷小判を二百兩計所持して居り升れば源次の分口の時預り置しは此金なりといふて御渡しなされたら夫にて事を濟すべしと悪智恵を教ければ藤兵衛は横手を打大に感じある程夫は宜べしと是に隨ひ實の金子と戎小判と筒替帳簿等の中へ隠し置所へ悴藤太郎外より立歸りておよしをば一間へ招ていひけると手前は何で我に氣を揉すのだ早く好き返事をして靡くべしといひければ私しは否みはすさねども親旦那が兎や角と被仰る也へ今迄好返事もせさりしが今宵社寛く話しや故夜中頃又は私しが居間の雜用部屋まで忍びて来て下さるべしと約を極めて別れける扱もおよしは用事を取片付椽先に立出りれば壹人の男來りておよしに向ひ手前は餘程長く待せたり一体何をして居たりしぞといひければ是はく金太さん約束の金子よりは少し多ひが二百兩計り出來たりと渡しければ金太は驚き是はく多分なる金如何してか拵らへしやと尋ねければ先程當家の主人藤兵衛どの順禮の金を預り宜仕事をしを私しは又戎小判と替させて横取をせしなりと語りければ金太は先金子をば懐中なしおよし用意をせよといひければ先衣物を着替筆筒を引さらへ風呂敷に包み込其位取れば跡には衣類一ツもなしと風呂敷包をばかしくの金太に背負せて裏の切戸口より抜出しが又およしのいひけるに是金太さん毒を喰ふ皿迄と連もの次手にもふ二百兩計の仕事は風來ついで有けるも是も一所に致したらば如何なりといふに金太は耳を寄せ其仕事はいかなる事をや夫は外でもなひが今日當家へ泊り込たる女御禮器並に十

八並に勝れし美人今宵源次といふ奴が殺す事け必定なり當人に右の聲をばいひ聞せ助けるを名として彼女を誘き出し何れへなりとも賣代なさは二百兩位には大丈夫の價ありといふに金太は然らば手前程能く懸らひ見るへしといひしが直におよしは取て返し雜用部屋に到りお千代に逢て申けるは如何に御女中様あなた何も御存じなれども當家の亭主藤兵衛と申す大盜賊にてあなたさまを奥山にて強淫せんとせし手古良の源次といひ合せ二百兩の金を取んとて今宵夜中を相圖にて此部家へ忍び入刺殺さんとの工みなれば疾く此場を落延給へど知らせけるにお千代は大ひに驚き然らば何分能よふに頼み申へしと有ければ私しとても此家を立退候也御同道を致すべしと十分に欺むき連立て墓口より逃出しける此時かしくの金太お千代の風俗面影を見てつくつくと思ひけるは此順禮人品といひ器量といひ此様ある女をば一夜なりとも抱寝せば此身の本望なりまたおよしは女に似合ぬ惡徒にて今我れ若年にて殊にかしくの金太とぞ異名を取し男振のよき也へは問夫とはなしけれども我れ又年老て風俗の衰へたる其時之又外にて男を拵らへ我を打果さんも計り難し此様な劍呑なる女と添ふよりいつその事におよしを殺この順禮を女房にせんと自分勝手手道理を付たちまちに心を變じおよしの後ろに立廻り手拭にて既に首を絞んどあしける故およしと驚きもがき叫ぶ此時お千代は我命の恩人なりと思ひしかばおよしをば助けんと争ひけるに此時一人の俠客竹の男出來り今日は女の泣聲の流行日あり見捨て行も本意ならずと先金太をば引捕へおよしを助け事の子細を尋ぬるに二人の者は身に暗き事の山くわれば一向に歸も語らず又風呂敷包みなぞ有也へに怪敷思ひいろく拷問に及ひければ流石女の事也へにおよして金太が心替りせし事より風呂敷包みは盗み取し衣類にて又此女中へ勾引さんど

て勝り出せし藤兵衛又金太の懐中に二百兩といふ金子あり是は此女中大黒屋藤兵衛といふ宿  
 下七の亭主に預けられしを藤兵衛は是を奪ひ取んとせしを猶父我ら横取せしなりと初めよりの  
 二下七 したらを遣らもなく白状致しければお千代は大いに忙れ果けるかの刺客は憎き二人の振舞  
 かなど先二百兩の金を取戻し是をばお千代に返しやり細付の二人をば問屋場役人に預け  
 る此時お千代かの刺客に向ひ今日計らすも砂手の奥山よてあなた様の御蔭にて命を助かり  
 いま又この難を御救ひ下されば段誠御禮のやよふも是なしとて大いに是を謝しければ快  
 容は順禮に向ひ全体をなれば何國の者なるやと尋ねしにお千代は心打解て斯大恩に相なる  
 止は何をか以て包み隠さん私しは生國江戸表にて戸坂内記と申者の娘にて夫の頼みし御方  
 此節嚴敷御配符の廻つたる相馬大作本名は尾崎秀之助といふ者なりと語れば刺客大  
 目におおろき扱はそなたと相馬大作殿の御妻女にて有けるか我は則ち其大作殿と兄弟の因  
 みを結び兄上と尊敬したる御方なり斯申我は國定の喜三郎といふものなりと物語りければ  
 お千代は是を聞て大いに悦び力を得しと勇みけるさて又大黒屋藤兵衛方に於ては倅藤太郎  
 よき時分なりと夜半とおはし頃頼用部屋へ忍び來りて寢所を探り見れと聞がりなれども  
 蒲團を出たる跡の明て有ければ藤太郎の思ひけるよふおよしは今便所にでも有たりと見へ  
 たり戻るまで寢寝をして居しなれば歸り來りて蒲團をば捲て見るは必定なり我か忍ひ來り  
 しと思ひて我が尻をば捻り又は脇の下をば撫るを空噴して嘲も又樂しみなりと一人り言を  
 いいつ、理寢入をして居たる所へ二階より手古良の源次拔足にて密かに雜用部屋へ忍び入  
 一刀をば抜き蒲團を捲らんとせしに藤太郎可笑さをこらへ扱こそおよしの來りしなりと空  
 圓して居る所を源次は一刀の下に藤太郎が咽笛を難なく差通しければ何條以てたまるべき

虚空を纏んで相果ける源次は血のたる刀をぬぐひ蒲に納め死骸をふとんに巻付て疊の下に  
 又置すぐ様蓋所へ取來り首尾よく打果したるを藤兵衛に述べれば然らばとて藤兵衛はか  
 の夷小判の百兩を渡しければ源次悦び改たれ見るに何を計らん似せ小判なれば大いに怒り  
 やい藤兵衛余の者なればこの様なる計略にも乗るへきが相手は手古良の源次様だ余りに人  
 を馬鹿にするな其手は喰まじ實の小判はへ出せといやひ腰にて詰寄れば藤兵衛は些も疑か  
 ず蒲團より預り置き金は此小判なり是が否ならよせといへば源次は堪へ兼最早了簡相なら  
 すと一刀閃と抜き放して双方互ひに欲の一心負す劣す打合所へ明よくと表の戸を頻りに  
 叩きけるもの有藤兵衛は源次に向ひ暫らく待へし面倒なれども何者なるや明て來るから  
 死刀を引といひ渡し戸を明見れば壹人の刺客順禮の女を引連れ跡に問屋場の役人金太およ  
 しの兩人を引立來り此時刺客と藤兵衛に打向ひ其方は順禮より預り置たる二百兩の金を出  
 すへしといはれて藤兵衛仰天なし今殺したる順禮が何故爰には來るなりと不審源次も是  
 はと惘れ果猶亦かの男は奥山にて逢し刺客なれば是悪事の口はれ口なりと此場を抜て裏口  
 よりいつの間よやら逃失ける刺客重ねて藤兵衛はいひけるは仔細あつて其二百兩金は此順  
 禮の手より戻れり先一應其方の簞笥の中を改先見よといひけるに藤兵衛は一切合点行先  
 簞笥の引出しを明見れば中は皆く蟬蛻の壳なれば藤兵衛驚き是は如何にと駈け來るを快  
 容は金太およしの悪事を述べ二人の細付を出しければ藤兵衛は又も驚き忙然たりしが此時  
 およしが悪行の段々を悉皆く白状を致せしなると云ひければ藤兵衛猶も不審をなし先  
 程源次が殺したるは全体何者なるやと雜用部屋へ行見れば其處ら透りは血だらけにて疊の  
 下を見るは蒲團にて巻し死骸のありけるもへ早速捲りて是を見れば現在我子藤太郎なり

ければ又もや肝を潰しけるが此時藤兵衛國定の前に進み出て申けるは斯の悪事現在に天罰の程こそ恐ろしけれと此場にて髪を切り出家となり已後悪行をば断然と思ひ切りは故何卒御情を以て我らの悪罪を御免下さるへしと真心を見へて詫ければ喜三郎國定は其發心にめて、罪を免し取らすへしといひしかば藤兵衛は大ひに悦び此家の家財を取片付是まで悪事をなしける上我が俸の菩提の爲とて皆くへ暇を告諸國願廻をなさんとて何國を當といふ事もなく出立又及ひしは殊勝なりとぞ思はれける猶又金太およし兩人はいろくせんぎの筋あるへきとて所の代官へ差出しに相なり裁判の上にて追放の罪に極まり奥州を逐拂ひ申付られける又喜三郎國定とお千代の兩人は砂手村を立退き神宮寺村を志ざしてぞ出行ける

第拾壹回 尾崎富右衛門お千代に面會の事

儲も喜三郎國定お千代の兩人は砂手を立退信州神宮寺村高橋市郎右衛門が宅へたより來て市郎右衛門に申けるは此女中は先頃當家に於て御厄介に相成りし番師宗丹の女房にてい故姑く御世話下されたくと頼み置き其身は大作の行衛を尋ねんとお千代に別れを告其ま、此所を立出て諸々方々に尋ね行ける扱市郎右衛門はお千代の邊道を試し見るに女の嗜む一通り何知らすと云事なく先第一に裁縫生花舞曲香茶などを達しければ隣家の小女等日又集ふて琴三味杯を稽古に來りけるをお千代は毎日是を教へければ市郎右衛門も誠に悦び我家の娘の如く寵愛なしけるにあり日御大身の武家高橋市郎右衛門方へ移立よりとありければお千代は應萬端料理拵らへ床の間の活花までなして相待所へ愈く代官御入宅にあり先奥の別間に通しお千代は跡にて合羽籠を見て有ければ酸劔漿の上に割書に尾崎と書印しあれ

ば自分が夫大作と同じ姓名同じ紋なれば若や親類縁者の者にてあらまやと兎角に心を籠り居る奥に有ては尾崎富右衛門料理拵へ且床の間の生花の工合類に打ながめ大ひに感じ主市郎右衛門を呼ひ此料理拵へと云ひ且又生花の手際實に感伏せり何人の拵らへ手業なるかと尋しかば身は我家に逗留致すお千代と申女なりと云はば代官女には珍敷者なり一應對面致度是迄呼寄て呉かしと請はれしかば市郎右衛門はお千代を呼ひ來り自分と用事に立て行跡には富右衛門お千代と差向ひ申ける様其方が料理生花の手際先程より感伏せりと御翠の言葉有しかばお千代此時申よと恐れ乍殿様は奥州南部の御藩にて尾崎富右衛門様とは申されすやと尋ねしかば如何にも我は尾崎富右衛門なり斯云ふ其方は何れの者なるやと尋られければお千代は私し事は江戸表にて戸坂内記の一女千代と申者にて御前の御子忠秀之助様と夫婦の縁をつなきし者なりと語れば扱は兼く中山幸之進殿より問及ひしか千代とのよて有つるかと互ひに盡せぬ物語に過し時刻を移しけるが先其日は最早明方に至りければ代官は市郎右衛門を呼ひ此女は予が縁者の者故連歸るへし是迄永らく厄介に相成り忝けなく存するなりと一禮を述てお千代も厚く禮を述へ同道よて南部盛岡へぞ歸りける

因にいはく何故富右衛門代官となりて信州路へ來りしといふに南部侯には此は忠秀之助の忠義を聞し召れ感賞の餘り富右衛門を招き其方が粹秀之助我領地の爲に一命を惜まず碎身の忠義を盡す事最早予が心底に通じたり依て疾くも尋ね出し國元へ連歸るへしとの仰により富右衛門は諸々方々を尋歩行けるとぞ腕の佐吉麻庵を尋る事

爰に奥州桑折の驛より十八町片在に今手村と云所あり是伊達三次が子分の一人腕の佐吉の



住所にて久々に佐吉我家に歸りて見るに表は戸を締切てありければ不審に思ひ暫しす  
みてありければ隣家の人々出来り是は久吉さまのなれが永らく御留主で御座つたか  
ら飛でもない事が出来せり全体もなれも物騒な男の食客と女房を内へ置て一月儘よ二月と  
御留主もへき久さんも凄まじの余り出来し事ならんと云は佐吉一切各点もかす何んを變な  
事でも發しなるやと尋ねしかば變な處かお前さまが留主になつて其跡は久さまと食客の  
金太と種ぐにいちやつさ差向で酒上味淋よと買て來て夫はくは毎日く晝となく夜と  
なく見られた事では御座ぬ其わけには道具家財皆賣拂ひ夫を旅用金にして此間二人連に  
て欠落致したりと話しければ佐吉は大ひに駭き申様皆様も一体深切氣の無人かな斯様なる  
事のならね先に何故一應知らし下されすや夫では隣家の好みも何にも無と怒りければ人々  
は放し休にて各宅に返りける後又佐吉黙然として氣が逆上り假令何國へ逃隠るゝとも  
捜し出さず置へさやと方々を駆廻るに向ふより野塚圓平といふ者來り途中にて佐吉とべ  
つたりと出逢ひテ、誰かと思へば圓平じやなひかテ、手前は佐吉かどふ迄至極顔の色が悪  
ひじやなひかどふしたものだ尋ねられ佐吉申様圓平聞てくれ己が留主の間にお久めが  
しくの金太と不義をさらして何國へか欠落せしなり夫故へ是から方々く尋ねあるかんと  
思ふなりといひしかば圓平それは誠に氣のどくだ併し其おひさ金太の居所は己が知つて居  
る此間いさ、か用事があつて豊尾直右衛門の方へ行しに火ばちの傍に居つて居は儲は手前  
が女房お久で有たからせりふがあれは豊や直右衛門の方へ行へしと云ひつゝ圓平は立別れ  
ける此事を聞て佐吉は大ひに力を得て其足にて梁川の宿ある豊や直右衛門が門口まで來て  
櫓子を伺ふに直右衛門が宅は間日三間にて櫓子造りの家なれば櫓子の邊間から内を覗て

見れば火鉢のそばに表向きて坐て居しは女房おひさにておれば佐吉は勃然として是正しくおひ  
さ金太の兩人なりと思しかば入口瓦落離と辨明ていきなり一舟引揚てかの舟を目標で打込  
ば男は胸に斗りに身をかはしければ佐吉は火鉢の真中をとした、か切付れば火灰散て煙の如  
く此時彼男は佐吉が腕首腕かと掴み何奴なりと顔を見て手前は三次が子分佐吉じやないか  
といはれて胸に顔を見れば金太にあらで直右工門なれば是はと難き親分眞平御高免下さる  
べし眞は私しが女房お久どかしくの金太と不義を致し聞は親分の内に隠匿有る由にて今其  
實否を糺んと櫓子の外より覗し所粉方なき女房おひさ又向ひに座りし親分を金太なりと見  
損ひ粗忽千萬何共申譯なし何卒御勘辨下さるへしと頼みしかば直右衛門が申様畢竟我が腕  
に腕へが有て身をかはしたなれば社並々の者なれば汝らが爲に命を果すへし又不義ものを  
返せならば扱て親分斯様くでと入譯云て來れば相手は男を磨く直右衛門は夫れを兎や角  
といふ理やある然るに唯出し援に内へふみ込此直右衛門を踏付た致し方それは何ぞや親分  
人違ひなるとは尿がわきれる以後の見せしめ思ひ知れよと許りに庭へ取て投げれば直右工  
門の子分大勢來りて親分此奴如何致さんといへば直右工門申様此所にて殺すべき奴なれど  
も先達で三次と喧嘩を致したり夫に今此處で佐吉を切る時は直右工門は未だ喧嘩の根を以  
て居るかと思はれても残念也依て今日の處は助けて取らせと子ぶん大勢足で蹴るやら痰を  
かけるやら犬の子を放り出す如くに首筋を掴んで追出しける此時佐吉は心外あれども相手  
は大勢なれば虫をころして我家へ歸り一つの思案を定め親分三次が方へ來り申様親分折入  
て御願ひ申度儀有といへば三次は六ツヶ敷折入て願とは全体何の願ひ成やと尋ねしかば佐  
吉は何ぞぞ私し御願を下さるへしとしみくと申ければ三次は佐吉が顔色と云且は様

子有氣な願ひなれば佐吉や手前へは何か心配で有や打明て申へし親分子分の問柄三次が力に及ふ丈けは事を計るへしまさか見捨は致さすと云ければ佐吉大ひに悦ひ外の事にもあらず先達てより我ら留守中に女房か久かしくの金太と不義に及び其二入りが疊屋直右工門方に居る由を聞今日直右工門方へ参りし所火鉢の傍に男と女房と差向ひて話しをせし故彼を金太なりと見違ひ飛込で切付し金太に非ず直右工門親分故へ早まつたりと事の次第を述べて色くど詫けれども一向に承知なく子分の者大勢来りて我を打擲なし入口の外へ投出され大ひなる耻を蒙り其場にて切死せりと思ひしなれども親分に一應御暇を貰ひし上にてと心を定めたち歸りしとの次第を一々に述べ聞て三次は何事と思ひしに左様の事なるや其様を事なれば此三次に一應相談せは力にもなるへし其爲めの親分子分なり此三次が宜様に取計ふへしと三次は綱五郎を呼今佐吉が斯様くの譯にて直右工門へ不禮を致し又佐吉が女房と密夫の兩人を取返しに行て呉かし我が行も宜様な者なるが夫では事大行になるもへ御苦勞乍ら手前が應對して呉るべしと頼みければ勇氣の綱五郎早速承知を致左あらば直様参るへしと三次が宅を立出て梁川の驛疊屋直右工門方へ行て案内を乞直右工門親分と些と御申し致し度儀御座る故親分に左様告げ下さるべしと云ければ子分此事を知らせれば出来たり是は綱五郎何用有て来りしと問ければ綱五郎申様外の事でも御座らぬが今日腕の佐吉が當家へ来りて何か不禮を働らさし由親分三次に代りて私しが幾重も御詫申上り時に佐吉の女房か久金太といへる者と不義を致し親分の内に厄介成と承り何卒二人を御返し下さるへしと言しかば直右工門申様手前の申慮尤もなれども此直右工門も一旦隠匿上からは命に代ても世話するなり夫れも隨て涙せとあらば三次が内の大事の客人と引換に

致すへしと云ければ綱五郎も此返答に困りしなれども流石の綱五郎否みもなさず夫とや親分の望みにまかせ明日阿武隈が原にて朝六の時辰に双方取遣り仕へしと立派に返答なしければ直右工門も左あらば翌日を期すへしと互ひ又堅く約しける綱五郎は桑折の驛へ歸り此趣きを逐一三次に話しければ三次申様供も名うての直右工門なればよもや本人の金太は渡すまじ又此方も實の客人を遣つてたまるべき綱五郎は横町の我家に歸り三次は子分を集め申様明日は阿武隈が原にて疊屋直右工門と大喧嘩を致により朝六の時より皆く揃ふて出るべしと云置又一間へ大作を招き時に大作様此度目明しに嗅出されし由にて明日斯様くの大事件御身此所に有ては如何なれば是より始ばらく身を隠し下され度私しが兄分にて江戸鉄砲洲屋敷さ横町に鉄砲藤次といふ俠客御座る故是へ御便下さるへしと一封の頼み状を添て渡しければ大作大ひに歡ひ何から何迄其方の心遣ひ忝存るなり跡の所は頼又綱五郎に宜敷傳へ呉べしと其儘桑折の驛を立退き江戸鉄砲洲屋敷横町鉄砲藤次方へとたより行ける

第拾貳回 阿武隈が原大取合の事

初も翌日の早天より子分凡三百人斗り寄來は三次は衆に向ひて申よふ假令直右工門子分の奴原刃物得物杯を持て争ふども此方は得もの一本も持まいる事相ならずと嚴敷戒しける此時子分一統に申よふ高が疊屋の子分也得物杯持すとも親より讓の両手が有故拳を以はり倒さんと勇み居る子分のもの綱五郎最來るやくと待ければも未來らす既四の時にも移りければも未だ來らず子分の者は涼をさらし三次に向ひ綱五郎親分は憶病神に取付れて何所へか逃失しなるべし杯と種と悪口を罵りければ三次は綱五郎に限つては中々逃隠れすへき者



に非ず最程なく来る可と子分をすろしける所へ向ふの方より綱五郎何か風呂敷包みを携さへて子分らに打向ひ借く皆く大ひにお待せ申て定めて御不興にありつらんと挨拶なされければ子分一統綱五郎親分に別嬪のねくにさんと戯れでもいふて御座たから一様に遇くなりしといひしかと綱五郎打笑ひ是は異な事を聞ものかな我は女房と戯言杯を申て約束の時刻を外さんや女房おくには如此な姿となりしと風呂敷の中よりお國が生首さし出せば三次始め群居る子分ら大ひに驚き扱く綱五郎親分の鐵石心よと皆く感じ此勇氣に勵まされ御座も勇氣百倍す綱五郎申やう斯女房を斬て來からは更心残り無しさあ皆く衆はつゝ參るぞと御座らぬかと云は子分聲を揃參るへしと先駕の中は綱五郎を乗せ込み駕の棒鼻に三次が控へ其外三百餘人駕の周圍を取捲て意氣揚くとして歩み行此時身の丈振群の大男駕の棒鼻に手を懸て此駕姑く待と呼はれば三次を始一統の子分何奴なれ此爲体と大ひに怒り手を下ろさんとなしける此男些も騒がす我社は相馬殿の弟分國定喜三郎といへる有なり此客人は我が成へしと云しかば三次綱五郎も兼て大作より弟分に國定といふものありと聞及ひければ扱御身が國定殿よな我は三次綱五郎といふ者にて相馬殿の家來も同前なりと云しかば互ひも爰まで打解喜三郎を駕よ乗せ棒鼻の左右に三次綱五郎兩人附添堂として阿武隈が原まで來て見れば兼て期したる事なれば直右工門方には駕二挺に同勢四百人計り付従ひ六つ過方待請してありければ三次が來るを見るより曳やりの聲諸共傍近く進み來り直右工門は客人の代りに綱五郎が駕よ乗り來ると思ひの外綱五郎が一鼻立て來りける故案に相違すれとも二挺の駕を下し此方も一挺打下し先疊屋の隠匿人二人を出しける故見ておれば前より知れたる歸玉なれば綱五郎此二人は人が違なりと云は直右衛門も其方の

客人と乞けるゆへ喜三郎國定駕の中より出でければ直右衛門申やう是も人が違ふなりといへば綱五郎大ひに怒り直右衛門よく聞へし其方より客人を所望するゆへ客人を連來り此客人で無くは何故姓名を云すや只だ客人とある故へ客人を連來るを人違ひ杯とは人を嘲弄するや了簡ならずと怒ければ喜三郎も大ひに憤怒し大音にてヤア疊屋の小童は共客人を所望しながら人違ふとは言語同断なりといひつゝ拳を振り上げ當るを幸ひに張倒せば直右衛門の子分の者奴を逃すな打のめせと手にて口或は割木金棒得物くを携て國定目かけて打付る此時双方大聲上げ奮撃す實は戰場の軍門に異ならず直右工門方には得物を以て向とも三次方は無手にてあれば三次は子分を勵し彼が得物を取て勝負せよ得物を出しなば負なるぞと爰をせんとと差圖をなしければ我一に先を争ふて得物を引たり直右工門か子分目掛けて打こそあれ瞬間に疊屋の子分打延されけれども彼の方は大勢なれば必死と入換り双方共血の雨を降り死骸と積で岡をなし血はながれて紅の川を生し鎧さを削る形容は目覺しかりける事ともなり此時に有ては八州の役人數十人此喧嘩を見るよりも御用の聲へ張揚て召捕へんとなしけれども流石に奥州に名を得たる俠客群の大取合なれば御用の聲位に傾着有は社火花を散して打合くなしけるは容易く騒動の止まされども三次が方では役人よ手向かはす快よく捕縛に付ける故直右工門方にも是非なく縛に就ければ役人の方々は召人を引連て所の役所へ拘引なしける

第拾三回 郡役所裁決の事

斯て役人衆は阿武隈が原の喧嘩の黨を御引立に相成郡役所にて御取捌きになるに伊達三次す、み出で申上げるよふは今日喧嘩の始末發端といふは私しが子分腕の佐吉なる者あつて

其妻かひさあるものと食客金太と密通をいたし家財有金等を携帶次第仕り其兩人が隠居直  
 右工門方に世話に相なり右佐吉心外の餘り疊屋方に至り本人を取返さんとなしければ直  
 右工門何か不禮をいふて一向に請かす故に猶人を遣はして頼みければ直右工門は我等の  
 家の客人と引換にすへき權管有し故双方阿武隈が原にて交換すへき約束仕り今日右場所  
 て取かへの所直右工門本人を隠匿し置外人を連れ来て人を欺き以又我方の客人を望み  
 故此客人を連行して人違ひの旨を述べて喧嘩の仕組にや竊口刺木或は金棒杯を携て打翻せ  
 り又我方は喧嘩を好まぬ證據には得るものを持せず唯彼方より打込得物を取て向ひしなり故  
 に聊不法を行すと辨舌爽やかに申上ければ役人は是を聞き直右工門に向ひ其方は何故斯る  
 亂暴を行ひしや逐一に申上へしと仰られしかば直右工門自分の方と重く惡ひ故返答に  
 まう一言の言葉も得申上されて役人の中直右工門一言の返答せざるは三次の條は相違なし  
 と見へたり是りや汝等は聊か役用を勤めながら公儀の恐れをも憚からず亂暴せし段不持至  
 極なり其方は急度所分も有難かある直右工門か宅へ到本人兩人引立へしと下知に馳ひ下役  
 は直に兩人を召捕役所へ引連來れば役人仰せあるやう金太おひさの兩人夫を顧す密通いた  
 せし段重く不届至極なり重罪にも行なふへき奴なれども格別の憐みを以て奥州國御ひ申付  
 へしと仰せられける此時喜三郎進み出て申稟恐れながら此金太と云ふ奴先ころ砂手にて盜  
 賊を働らさ人の金子を掠り取り尙其上に女を勾引せんといたせし所計す私し此ものを召捕  
 りしに給ころへしと願ひければ早速御許有ければ國定金太と賞ひ請其場にて真二ツに切殺し  
 ける又直右工門は處違加となり三次をばじめ皆の者は御捕なく差もどされける

關其助須賀留備中守を阻撃する事

其助相馬大作は江戸表鉄砲州屋敷横町鐵砲藩次方に食客の身となり其身を忍ひける又斷  
 も三次よりの蒸書もあり名高き大作の事なれば手厚く接て待ければ大作も大ひに歡こむ事  
 しけるか後に三月上巳の節向四方も祝ひの其折柄大作と黃昏時兩側橋邊を通り掛りしに其  
 面より數多の供人を引連諸候の下城と思し敷めしと行列にて前を拂ふて來るあり大作  
 は若や須賀留にあらずやとさうかふに案に違はず須賀留をれば能處にて出逢たりと大ひに  
 悦び橋の傍へに身を潜光待居る處へ御供廻り意氣を正し堂々として御通行に相なり今は殿  
 の乗物前橋の中央にいたる時大作抜刀して踊り出乗物目差して切付る此時從士大ひに驚  
 き曲者なるを召捕れと聲々に呼ばり中を隔て、防ぎ戦ふ大作はた、只乗物に近寄秘術  
 を盡して切立確立瞬く間十人を切倒し姑らく争ひしか此時須賀留の扈從の臣大島向某  
 殿の乗物を引撥け橋を渡り踏んぞなしければ大作は駕を遣てはならしと必死を究めて付入  
 しが大勢の從士に圍まれて心は矢猛れども思ふ様に儘ならずは心外に思ひ一聲叫んで  
 飛と見へしが大島某を只一刀の下に切伏せ駕の垂を明んとするに猶從士間を斷大勢鋭く打  
 込む刃に恰も真劍の雨降るとくくなれば今は大作も危く見へし所へ川中より一發の彈丸大  
 響きを生して殿の乗物を打振たり士卒大ひに騒ぎ立曲者逃すな召捕んと一生懸命の太刀先  
 に大作もたま、かね橋の欄干に手を掛ると見へしが眞逆さまに川中さして飛込たり須賀留  
 の士卒は水中より曲者ありとこれをさがし又は殿が御身はと伺がへははや胸先を打抜れて  
 息絶たり是に從士も勢を落し死骸を乗物に昇て立歸れりまた跡に残りし侍らひは急に船を  
 手廻し川中さしてさがしける水中には大作は川土に泳ぎ行ける所へ向ふの方より一艘の若

船漕來り泳來る大作の首筋搦んで引上げ船の中へと乗せ込めて兩國橋の上手をさし漕行て淋しき處へ船を繋ぎ船頭は大作に向ひ申様若や足下は南部藩にて尾崎秀之助假の名は相馬大作殿とてとなきやといひしかば大作不審の体にて斯いふ足下は何人にて御座るやと尋ねしかば船頭申様我こそは同藩にて槍山奉行下廻り關長左衛門が一子同苗良助と云者なり足下の忠誠感するに餘り數多南部の士ある中に足下一人國土の爲に粉骨碎身の勞を盡す願はくば我も少々の助力仕たく思ひ候へば國を發足なし諸方を尋ね求むといへども貴殿一向に相知れず然るに今日はうらす面會仕り此上もなき身の大慶と悦び勇んで物語れり大作は左すれば兼て喉に關長助殿にてありしや足下が助勢下さるとあらば誠によき片肌を得たり然し只今の砲發と御身に有しやと問しかば良助申やう如何にも我にて聊か助力の端をなせしといひしかば大作は誠に御身の御手際恐れ入しと譽め時に良助殿我は當時鐵砲藤次といへる者の宅に姿を隠し居候故此方に同道仕り萬事御相談すべしと是より兩人連立て藤次が宅へと立歸りける爰に又桑折の驛なる三次綱五郎喜三郎佐吉の四人も藤次が宅へ集り互ひに無事を賀し右七人の人々は晝夜種々の相談いたしけるに良助の物語りに我父良左工門槍山奉行下廻り相勤めし所上役荒浪十藏治といふもの當時須賀留家に従ひ矢張槍山を支配せり此者元來南部侯より八十石の祿を頂戴せしに須賀留に引込らし二百石の祿をもらひ請非道も二君に仕へける所が我父良左衛門が邪魔になる故父を討むき大勢打寄て暗打になし足を切て谷間に蹴り落せり父之命助りたれども身體自由ならず我此恥辱を雪がんと思ひ候故一度かの地に赴きたしとありければ此時大作申やう左様の事なれば片時も早く良助を雪ぎ玉ふへしといひしかば傍に居たる綱五郎及ばすながら我等助勢仕るべしと是より二人同道にて南部槍山として急ぎ行又大作は藤次の御手より江州香露湖の近在隆高寺といふ寺へたよりゆきける

第拾四回 關長助槍山奉行を打事

斯て良助綱五郎の兩人は旅の武者修行の風体と姿をやつし足に任せと漸と日を重て槍山に至りければ日は早西山に没しければ奉行の溜り所まで來り我等は諸國武者修行の者にて計らすも道に踏迷ひ誠に難儀いたし候故何卒今宵一泊を頼みければ居合せし八足此事を奉行十藏治に知らせければ武者修行の者とあらば一手合せ致したし此處へ案内すへしとありければ八足此由を兩人に告げれば二人は大いに悦びの体にて奥へ通り先荒浪に面會し今夜は一泊を乞ふて御承知下され千萬有がたく存し候なりと一禮をのべてあれば荒浪は誠に易き事なり今宵は寛々休み玉ふへし我は此時之山中に暮しければ世間の事を一向に知らず御身邊と修行の身なれば定めし珍らしき話しもあるへし疾く御咄し下されたとて足下の生國は何國にていづれの御藩なるやと尋ねしかば良助申様我が生國は南部盛岡にて父は關長左衛門とすて其傳良助なりと云より早く一刀抜放し奸賊十藏次觀念致せと近寄て肩口より胸板さして唯一刀は切付たり何條以て堪るへき其儘その所に打倒れ此時綱五郎も奮激して有合ふ人足切倒し暫らくの間に凡十五人計り打取れば十藏次の悴重三郎難敵と思ひけん門口に立出て警報の螺貝吹立れば此螺の音を聞付て槍山の人足凡三百八ばかり斧を以て集り來り曲者逃すな打延せと十重廿重又取巻て中に取圍み我劣らじと打かふる綱五郎と事どもせず切立難立働と何條三百人の人足入替り差代り向ふ程に流石の綱五郎も大勢の爲に後へ逃遁と懇て足の踏處を失なひ千尋の谷底へ轉落ければ八足共は此深谷に落ちては河

條命有へさやと獲る奴を打倒せと大勢長助に打て懸る此方はしれ者事ともせず獲れし獲待  
く左方へ飛では右方に懸はれ一生懸命必死となつて打合しが懸て木の根に墮り倒れ伏  
す所へ人足とも上が上へ重なりて手取足とり長助を尸字掬は縛上げ此山にて松井三平下關  
なし須賀留へこそは引立行ける

關長助處刑綱五郎義死の事

扱關長助は槍山にて荒浪十藏治を打果し數年の本懐を達すといへども人足共の爲にめし捕  
れ須賀留に於て御しらべになりければ此とき長助やう我こそは此節御尋ね敵數配符の廻  
りし下總浪人相馬大伴とす者なり法例に基き刑を受へしとありければ扱は相馬大伴にてあ  
りしや汝ぢは何故に我が須賀留家を執念深く斯まで敵對するや已れ處刑に行なふへしと則  
ち仕置場を設け一町四方の竹矢來をなし須賀留市中を引廻しの上にて刑所に至り檢使の役  
人は床儿にかゝり見物山の如く矢來の外に集り名高き大作の仕置なれば取くは話しをな  
し見物いたしける此時長助は青竹の上に坐り太刀取の役人白袴の一刀に水を流し太刀を振  
ひて傍に進み後手に廻り太刀を振かざして今や首を打ち剣となしける時竹矢來の外より大  
音聲にて役人其太刀下す事暫らく待へし其人は相馬大伴にあらす定先て似名を騙者ならん  
眞の相馬大伴是にありと群居る人々を押分く運入り來りしは大兵肥滿の侍らひにて立派  
なる出立其風体を見てあれば先裝束は黒羽二重の着付に同じく水色羽二重の下着黒縮緬の  
背鞆羽織四十二節の深編笠に面体を包み從容く出たる形相こそ是ぞ實の相馬大伴と思は  
れける此時彼侍らひややう似の大伴殿には疾く落延玉へ此實の大伴が刑に付可と云つ、  
飛掛て長助の綱目を切捨て早々落延玉へと逃し置自分は傍なる太刀取の役人を只一刀よ

辨す此体を見て須賀留の士ども又もや曲者出たり召捕れくと差圖すれば有合ふ士も抜放  
し侍らひ目掛けて斬付る此方の侍らひ事ともせず散く斬倒せの瞬間に死がいの山を横此  
とき須賀留の侍は追くにはせ集り一人の侍らひを取圍んで戦ふ處へ三次佐吉の兩人なり  
と聲を掛れば綱五郎力を得て兎貴よくこそ來て呉たりと三人一時に切捲れば又もや曲者増  
たり須賀留の方では狼狽なしける此とき綱五郎戦かひながらやう三次先今關長助を落し  
たり早々とも落延下さるへし此處は佐吉と兩人にて殿り仕るべしといひしかば三次は此  
言葉に應ひ綱五郎佐吉二人に任すべしと其儘三次は落延ける綱五郎佐吉の兩人は大勢を相  
手にして命限り闘らさて今は二人とも血まふれになつて仕合しが佐吉は敵ヶ處の重純に身  
体動得すどつかど倒息絶たり綱五郎は猶もひるます荒廻り役人數十人斬り殺し手紙負ふ  
もの數知れず綱五郎は最早是迄と思ひしかば積重りし死骸の上に坐を構へ手早く白襦はん  
の片袖を切り裂き右の小指を齒み切り垂る血にて一語辞世を誓す  
義に依て命を落す日本の俠客

羅生門綱五郎

と記し死したりける此体を見て須賀留の士どもは眞の醒たる知にて大ひに感けるとぞ扱又  
逃延たる關長助伊達三次の兩人は桑折の驛へ歸りける  
因みに曰く三次佐吉の兩人江戸表ありしに今此處に來り加勢する事不審なれども左  
にあらす右兩人は長助綱五郎の首尾よく仕負たるやの安否を探らん爲奥州路に來りし  
に大作仕置の事を聞大ひに驚き其事實を糺さんと該處に來る處長助大作と偽名を名乗  
て刑罪の有餘の兩人が加勢せしとぞ

十九 第拾五回 相馬大作網に就く事

爰に又相馬大作は鐘砲藤次の世話にて近江湖水近在高寺といふ寺へ書師宗丹と優谷し身を隠しける然るに爰に懸屋直右衛門之處追放請しより何か大作を嗅出し阿武隈が原の仕返し且は莫大の褒美にも有付んと諸々方々と尋ね廻り尋らす江州に來り隆高寺の住職と至つて入魂なれば此寺にたより來り大作が隠居あるを嗅出し馴染の講内四五人を語ひ大作を誘出し呉れへしと頼みければ早速承知し中にも宗丹と入魂にする者あれば湖水鮒獲を名として誘ひ出しける大作も元來鮒を好みければ是に隨ひ十二人程連立て鮒漁に來りしに二艘の船にて漁しけるに直右衛門方までは兼て其用意なしければ八方より大作を取巻召捕へんとせしかども何條名うての大作なれば容易に召捕事能はされども大作も船中なれば進退自由に働らさ得ず難敵とや思ひけん湖水へさんふと飛こみけり直右衛門は兼て手當なし置し大網を取出し八方より取圍み次第く寄ければ恰も海中にて漁父の魚を獲るが如くなれば流石の大作も此網に身を捲れ如何とも詮無く其儘引上られ尸字網みに縛れて所役所へ引渡され此役所にて下調なし此事江戸表へ報しければ江戸表より引渡すべき下知有ければ則ち繩乗物に乗せ込て守護の役人三十人懸り附添ひて送り既に鈴が森まで來りける時傍の石碑の間より二發の鐵砲響きを生じて重役二人討倒せば守護の侍らひ大ひに驚きそりや曲者なりと狼狽して騒ぎ立處へ石碑の間より國定喜三郎鐵砲藤次の兩人飛で出で當るを幸ひ切立く散々に打のめせば守護の侍ひ度を失ひしどろになつて逃出せば此間又兩人鵬鷄を打破り駕の中より大作を出しければ大作と何者の仕業なりと顔を見れば國定藤次の兩人なり大作大ひに悦び我斯召捕われしを如何して知りしやと尋ねしが藤次才様其儀は私し





宗丹は本行相馬大作といふ者にて去る日直右工門といふ者の爲に召捕われしと話しを聞て  
仰天し直様宅に歸り此由を語り國定殿と申合せ此所にて待伏せしなりと云しかば大作は扱て  
左様の事なるやと打悦ひ追手かゝるを憚り長話しは悪と打連れ其儘藤次が宅へ歸りければ  
又良助三次も江戸表へ登りければ五人打寄て話しをなし大作の事柄を良助三次に聞せ又良  
助三次は須賀留にて綱五郎佐吉の死去せし事を語りければ大作始良助藤次も不便の事を致  
せしと大ひに落涙に及び就中大作と我が爲に留々斯迄なし呉る事の嬉しさと悦ひあへり斯  
て晝夜となく相談して只々須賀留の動靜を窺ひける

第拾六回 大作妙見堂にて須賀留を窺ふ事

今日は大作良助國定の三人深編笠にて面体を隠し大師川原へ参詣して歸り来るを向ふの方  
より立派なる侍らひ深編笠にて女房と娘を連れて來り今三人の者と行違ひしに侍らひ跡を振  
向ふ三人の姿を伺へり打詠めけるは大作始良助國定も若や我等を探索する須賀留の家  
士か但しと上の役人なるやと思へは此方も彼の侍らひを打詠め居る此時侍らひ大作の傍近  
く跡戻りする故三人は扱て案に違はぬと思ひしに彼侍らひ中やう若や貴殿は下總浪人相  
馬大作殿にてはあらすやと問ければ藤次を以て心免るされすと思へども名を隠すは余り與法  
と思ひ如何にも推量の通り淺は相馬大作なりと答へければ彼侍らひ直に笠を脱て久々に  
逢ひやなり先之御針縫と申すは是れ何所の者といふに加藤市郎右衛門といふ者にして二  
百石の旗本にて當時御馬廻り役を勤めり先頃大作下總秀吉となつて須賀留やしきの別當に  
入込し時同じ別當の朋輩にて山下市藏といひし人なり父は御馬廻り役にてありし古修りゆ

爲須賀留の別當に成て馬の育方を試みしなり此時大作ははく山下殿にて有しや珍敷所に  
て御對面仕るなりといへば加藤やう足下其時産の宮にて須賀留殿を害し事ばら忠名を上  
げ其上尙今日に至る迄須賀留家を絶さんと千辛萬苦し給ふ其粉骨の勞を察し感服せり我は  
今父の家を相合せり又我宅は旗本の事もへ他方より探索もなければ暫く我家に身を隠し  
玉ふへし及ばすながら聊か助力仕るへし先く我家へ來り玉ふべしといひしかば大作も此  
節さふやら藤次の内も氣遣敷ければ兄弟の如くせし加藤なれば良助國定に委細を話し爰に  
て別れを告げ其身は加藤市郎右衛門方へ隠匿はれける或日加藤は大作と連立て淺草奥山妙  
見堀へ魚釣りに行てありけるに須賀留の法被を着たる別當が徘徊なしけるを加藤は引留て  
瓢箪の酒を振舞別當にやう其身隨之何用よて最前より此處を徘徊さるやと問ければ別  
當ややう何を隠そふ此程相馬大作とやら云浪人か殿を付覗ふ故夫を避んと妙見宮に護摩を  
修し給ひ明日は心願七日の上り日なり夫故我ら幾度も此處を往來仕るなりと答へしかば左  
様なるかといひ別當は醉氣に觸れめいゝ一禮を述て五六人の別當習く立去りける然る  
に加藤大作の兩人は釣を仕舞此日は兩人立歸りける

第拾七回 大作淺草妙見堂にて須賀留家を騒がす事

初も加藤市郎右衛門は其翌日に大作を招き申様今日は足下壹人淺草妙見堂へ釣を垂れに御  
越しなさるべしと勸ける大作も加藤の心底を計り思ふやふ加藤はわれを手引して斯やなる  
べしと大ひに悦ひ左あらば今日と拙者壹人參るべしと瓢箪に酒を入れ又竹の皮包に肴を入  
れて魚釣道具を携さへ立出て妙見堀へ至り釣を垂れある時之竹の皮包を開て瓢より酒を  
出し自分壹人酒を飲干しける處へ例のごとく須賀留の別當代へ出來り大作か釣せしを

跡めけるを大作は別當を翻め無止に酒食をわたへけるを別當等流石に下戸なれば大いに歡  
 ひ酒の飲大作は所存あれば思ひ切呑ましてありければ別當等々酒を催しいろく感事云了  
 り大作に一禮を述て立去もあり又殘つて醉臥もあり大作は最好時分と思ひければ醉臥たる  
 別當の印し絆天を脱し自分は其絆天を着なし釣の道具も何も打捨て妙見堂へ馳行ければ須  
 賀留の人々も印し絆天を着せしめへ雖有て咎むる者もなく通しければ大口と善尾好と心中  
 に打笑み猶奥深く進み室中を見てければ護摩を修せし焚火の煙りにて内の一子一向に分明  
 ならざれば暫らく目を配りて伺ひ居るに殿は武運長久の聲より上て祈れける此時大作得た  
 りと悦ひ忍より懐秘放し殿を目かけて切付んとせしかば早くも殿は身をかはさんとせ  
 しかば狭き敷臺故に恐怖の余り高臺より真逆様又落ければ傍に並居し須賀留の家士大ひに  
 驚き十二三人程を殿を圍て是を守る殘る士卒は曲ものやらじと取巻て召捕くと聲くんに  
 喚はり切り掛る大作は殿を討んといろくあせれども何分大勢の士卒に隔てられし事なれ  
 ば思ふ様にならねば切齒をなし爰迄十分近づきながら打取れざる事殘念やと悔たれども詮  
 方なく大勢に叶ひ難しとや思けん一方の間を得て早足にて逃げ出すを須賀留の士卒呼はり  
 て曲者逃すな追懸よと無二無三に追かけるを大作は一生懸命飛がごとく跡暗まして逃出し  
 加藤が宅に立歸此事ともを市郎右衛門に咄しければ市郎右衛門夫之殘念の至なり又よ好機  
 も有べしといひ先其日は打過しけるにどふやら此節旗本の内にて相馬大作を隠懸ものある  
 由誰云となく風説なしければ大作も此家に永居はなるまじと思ければ加藤市郎右衛門に厚  
 く謝禮を述て其儘此家を立退中山幸之進の宅に行幸之進に面會して久くの挨拶をしけれ  
 ば幸之進も我子の如せし大作なれば殊の外歡又大作の忠勇を褒め日夜盡させぬ承諾しなし

て先大作と此方に暫其身を潜伏専ら須賀留の動靜を窺ひける

第拾八回 大作味贈屋と成て須賀留を窺ふ事 須賀留右京亮を砲殺する事

斯て大作は中山幸之進の宅に有て不斗赤穂義士の一人堀部安兵衛武康の事を思ひ出し武康  
 は吉良家の様子を窺に自分の顔一面に糸をすへて顔の体を崩し八百家となつて吉良家の邸  
 中を知りしとあれば我も斯せんものと思て直ちに自分の顔に漆を塗付ければ暫らくの間  
 に顔は一面に腫れけるを鏡に寫し是なればよもや人相畫に似る所少しもあらずと打悦ひ古  
 道具屋に行て味贈屋の荷を求め金山寺味贈屋と成て毎日く宵歩行一日須賀留の屋敷門前  
 にて辨當を開ひて食をなしける所へ一人の門番出來り味贈屋に向ひ手前は向ふ先の見へぬ  
 者かな通行先の入口の奥先で辨當食ふとは無禮であらふ少し片脇に寄へしと云しかば大作  
 は是はく虚氣とせし眞平御免下さるへしと説をなし其日は立歸る又翌日も須賀留の門前  
 に至此度は一升徳利より酒を出して無闇に呑み干し又門前に立寄ければ別當又もや見付け  
 此奴毎日く門前にて唾を吐す奴かなと叱ければ大作は態と酔いたる風にて是はく御門  
 番御立腹の体なるや先アく其様に怒る者に非世の言も笑ふ門には福來ると云せば  
 先鎮まり玉ふへしおなたは毎日怒て御座ると見へて私しの機な難作者が門に來るへし杯と  
 いろく嘲哂なしけれと門番大ひに怒り憎さ味贈屋の言前かなと棒を以て打んとすれば大  
 作は驚さし体にて味贈の荷を擔ひ放くの体にて逸出す門番はつぐやさながら門内に入る  
 其翌日になると大作は酒肴を持參し門番に向ひ昨日と酒に酔何か無禮を申上誠に相濟申さ  
 す何卒御勘辨下さるへしと是聊なるものなれども私しが心丈け何卒を御納め下さるへし  
 と酒肴を出して詫ければ欲の世界門番も此贈り物に氣を直しやう如何に味贈屋我等別に

怒りはせねども餘りな言方故へに成して見せたりしなり決して怒るにあらず心許なく毎日  
 門前にて中食いたすへしと手の裏返して云ひければ大作はしてやつたりと心中に悦ひ其日  
 はいろく話しをして立歸り其翌日より門番と至極入魂になり間がな酒肴を持参して十分  
 門番を取込み終には門番の取持て屋敷中を廻るやうになし日數十日も立中には屋敷の  
 部家へ或は仲間別當の大部家迄大極廻らざる所なく皆此味噌やの正直を感んじて味噌や  
 くともて離しける一日例の如く屋敷中を廻り商ひ致しける所へ殿の御歸館とあつて大部  
 家の向ふを立通行になるに大部家の別當共下座して頓首なす此時味噌屋の大作も見付られ  
 てはならずと思ひければ大部家の中へ飛入置れるが様子を見れば殿が遙か向ふへ行過ぎ玉  
 ふと思ふ時分に大作は直ちに荷物の下の抽斗しより種が島の短筒を取り出し居列ふ別當の後  
 より視を定め火門を切て砲發すれば哀れむへし須賀留右京亮殿の脊すぢより胸板かけて打  
 貫たり何條もつてたまるへきと許りに打倒れ其儘息は絶たりける此有様を見るよりも  
 スハ一大事と須賀留家中曲者不捕れくと呼わり曲者は何所とかけ廻り家中の銘上を下  
 へと混ざつなしけるを一人の家士やう惱か又曲者は荷を擔ひし者なりといひしかば士卒  
 の者ども馳せ來り味噌や見懸て打て掛る此時大作は請つ流しつ打合しが殿さへ討ば士卒を  
 惱ますは無益ありと思ひければ此方の道を開き大部家の武士窓より暗くして逃出すそり  
 や曲者逃すなど怨の跡より追ふも又門口より出て追ふもあり爰に一人の侍らひ泥酔ひ千鳥  
 尾にて彼方へ遠逝此方へよろめきながら追ひ來る須賀留の士卒を小口なら投倒し或は一刀  
 の下は切付向に逃りて一向に追せず須賀留の士卒大に怒り又途中にて一人駈きたり此者か  
 ら打果せと打てかゝるを侍らひは事どもせず追來る須賀留の士卒を貳みごろしに片付して

づくと行過ける是何者成といふに關長助にぞ有しなり

箱拾九回 大作盛岡に歸り家縁取決の事

扱も大作は中山幸之進宅に歸り幸之進に面會なし申様永を厄介に相なりひへども姑く他方  
 へ行べしと一禮を述べて告げ直さま藤次が宅に來りて關長助に對面なしややう我等も最  
 早須賀留家三代まで討とり絶したる上は自訴仕べくなれども取計へき旨あつて余義なく國  
 許へ立歸りたく跡より自訴仕へし足下は何卒先へ自訴をなし下さるへしと云しかば長助は  
 然らば拙者先自訴仕るべしといひ互ひに堅く申合せ大作は國定喜三郎伊達三次鉄砲藤次の  
 三人を引連奥州南部盛岡として立歸りけるされば關長助は大作と合せし如く願書を以て  
 北伊奉行の諏訪美濃守殿へ自訴いたし跡より相馬大作といふものも自訴仕るべき旨を  
 申上しかば美濃守どのの關長助を取り調べ中禁獄仰せ付られけり爰にまた大作は奥州  
 盛岡へ歸り久々にて二親を講しければ富右衛門夫婦涙を流して大いに悦ひ我子ながら天晴  
 舉動感ざるに余りありと譽をやし又女房お千代も大作の飯國に飛び立計悦こひうれし涙は  
 呉れ居しが姑あつて申やう爰はあなたに戀慕ひしより親の異見をも用ひず艱難苦勞をな  
 し最早あなたさまに逢ふ事あらざるかと朝夕に思ひ暮しけるに今お顔を拜する事の嬉しさ  
 よと變にすがりて落涙せり此時大作千代に向ひ其方も我を斯思つれども我は何條天下の  
 御尋者にて大罪人孰も運ぬ我が一命運も其方とは連れ添ふ事成ねば疾く斷念呉れかし又  
 爰に居る國定喜三郎は其方の爲には弟ぶんゆへに此國定と夫婦成りて呉れかしと願けれ  
 ばお千代は噎ひ涙だ猶彌増あらうたてや永らく待し甲斐なくも現在夫に逢ひ乍其御人に添  
 七ふ事ならずと有は何面目にこの世に在ん生て詮無事なるへし此上は斯仕るといふより早く



傍なる刀かつ取り自害をせんとなしければ大作 駭是を止め早まるまじ其方が今爰で死す  
るとあらば未來永く縁さるべしそれでも其方は承知か云れて千代は自害もならずしは  
くとして歎き居る大作は又國定に向ひ御遷も定めて斯様ある水嗅女と添ふも異ものと思  
ひつらんが是は大任が生涯の頼み聞き呉れへしと頼まければ國定才様否く我らさに  
非す斯たる貞婦のみ千代どの我等何の否みやへきや身に取て大慶なりと答へしかば大作大  
ひに悦重ねてお千代にややう我媒ちになる間潔祝言して呉れへしとかへすくも者  
の賺つ頼みければお千代も思ひ回し自訴なざる御方に添ふ事のならざる如何程悔むとも詮  
なしと斷念承知に及しかば大作大ひに悦ひ直さま祝言を致させ自分は媒ちとなりて尾崎の  
跡跡を立にけるとぞ

箱貳拾回 南部大膳太夫候大作又對面の事

斯て大作は父富右衛門に才様私事須賀留候を打取たる上は此上望も果しぬる事成は潔よく  
自訴して御仕置を受可覺悟なれば何卒今生の内一度殿南部侯に拜謁致度旨願ければ富右衛  
門より其方が願ひやすと殿より焦待詫玉ふ也と語りければ大作涙のみこむばかりな  
り夫より大作の歸國を報じければ殿は大ひに悦あつて早速御招ありければ南部の一家中此  
事を聞我もくと見物に集ける然るに秀之助は御前間近く進みければ一家中の面々列を正  
して左右に居並ひ秀之助といふ者は如何様なる人柄ならんと目を澄して見物せり此時  
殿は正而に煙し玉ふ秀之助は殿の御傍近く進み寄り先は御壯健の体を賀す此時殿は落涙  
を流はされ其方事我が國土の爲に身命を投うち粉骨碎身の勞を盡す段予が膝底へ感激せり  
過分存するなり其恩賞には盛岡一の宮神社の片脇に相馬大權現と崇め祭り遣わすへしと仰

られければ秀之助大ひに悦喜し有難き殿の御仁恵かな聊かの忠勤をなせしに斯道で御心慮  
に叶ひし事私し身に取りてこの上もなき大慶なりとや上げ又殿にや上るやう私しが天下の  
法令に背き假初にも御歴々を三代まで討取たる其罪輕からず是によりて自はしりへば私  
しなき跡は父富右衛門事宜しく御目を掛け下さるへし又家續の義は私し弟分國定喜三郎を  
以て相續し故此義も願ひ奉りひなりと申ければ殿は其方願の趣は一々聞届たれば心安か  
るへし又江戸へまいる道にて不意の危難も難計ければ予が印を以て供の者の大勢引連れ予  
が参勤の格式にて出府すへしと心添有て又秀之助に助力いたせし伊達の三次鐵砲藤次の兩  
人に褒美金を賜はりし上に水代二百石の大祿にて御召抱へに相なり又國定喜三郎も右同職  
賜物にて祿は二百石の加増にてそれく賞を行なはれける

并南部榎山取返す事附り大作良助刑に處する事

扱も尾崎富右衛門は南部全國の番圖面と願書をもつて時の老中へ願ひ出ける其文面に曰く  
乍恐願文を以て願上奉り今般須賀留家に於て猥りに我嶺山へ登り棒杭を立て八十三里  
の檜山を所領としてこれを奪ふ其故は原榎山我が嶺山たるに依り一度將軍家より用木を獻  
すへき令ありしに不孝にも公儀の令を背きしを好機とし須賀留家より間を得抽んで用木を  
獻せり是れ我嶺山へ斧斤を入れ横掠する所也何とぞ別紙番圖面御引合せの上にて宜しく御  
賢察懇願奉り候あり

右の願書を差上げれば元來この事は御上にもよく御存知ありし事なれば相違なきと論を待  
ずして明らかなり是に依て一言の故障なく榎山を取戻しける又須賀留家に於ても打續さず  
慮の横災に罹られし末なれば自然と衰弱に陥入押て一言の上達もいたさすとなり爰に北御

百 奉行誦訪美濃守殿又は大作を御白洲にて其方は南部の士にて尾崎秀之助仮名大作と稱する者で有ふがなと問れしかば大作やう私しは左様なる者にあらず下総の浪人相馬大膳の倅にて同苗大作といふ者に相違なく父大膳浪人して江州瀬田の邊にて横死仕れりよつて我は一人り身にて諸國修行の所惡業の者を圖をもつて誓願とすもへに須賀留の奸惡を聞き斯く相計らひしなりと答へける奉行も見すく尾崎秀之助たる事分明なれども義心忠勇の名にめめて敢て憐れもなく大作既助の兩人法律に基つき斷罪の刑に行なはれける嗚呼忠勇なるかな大作既助のとき古來未聞の英士にて凡武士の家に生育するものは殿の馬前にて討死するが又は死をもつて諒言せし類をもつて忠義の者とする所大作などは殿の蔭身に粉骨の勞を盡すこと實にまた古今稀なる忠勇の壯士にして其の芳名を後世に遺すの美談といふべし

相馬大膳忠勇傳終

明治廿三年二月廿一日印刷  
全 年二月廿五日反刻出版

發行者

辻 木 九 兵 衛

東京市京橋區南傳馬町二丁目十番地

印刷者

町 田 宗 七

東京大賣捌

種史小說問屋

馬喰町二丁目  
横山町三丁目  
淺草三好町  
本石町  
通四丁目  
全四丁目  
全四丁目

山 辻 大 上 金 春 明

口 岡 川 田 櫻 陽 進

屋 屋 屋 屋 堂 堂 堂

